
龍の髭

富樫 聖

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の髭

【Nコード】

N8908L

【作者名】

富樫 聖

【あらすじ】

トウーリオ国では王子が17歳になる時に花嫁コンテストが行われることになっている。明日で17歳になるシオン王子の選んだコンテストの内容はなんとドラゴン退治。一方、主人公の宿屋の娘シアは祖母の病気のこともあって、コンテストに参加する予定は全くなかったのに、なぜか王子さまとその従者にそそのかされて急遽参加することに。果たして祖母の病気を一発で治せるという伝説のアイテム『龍の髭』をシアは手に入れることができるのか？ 王子さまの花嫁選びコンテストの行方は？ 本編完結しました！

第一話 シアとおばあちゃん

「バイス」

まどろみの中で、そんな呼び声があたしの世界に入ってきた。半分も機能しない頭が、にわかに動きだす。

「バイス」

けれど、その声は、あたしの意識を目覚めさせるには至らない。だつて。

「バイス。バイス。起きなさいな」

どこかで、聞いたことのある声。でも、それは違う。あたしじゃない。

「バイス」

手が、あたしの体を揺り動かす。その頃になると、あたしの意識はだいぶ目覚めてきていた。でも、まだ目が開くほどじゃない。半分夢の中。だつて、それはあたしじゃない。

「バイス。朝食の用意が出来てますよ」

違う。違う。あたしはシア。バイスじゃない。バイスは……そうだ。父さんの父さん、つまりおじいちゃんの名前だ。一年前に病気で死んでしまった、おじいちゃんの名前。

「……って、え？」

あたしは声と共に目を開けた。鎧戸の隙間からもれる朝日が、目を刺して、あたしは思わず細めた。そして、あたしはあたしのベッドの傍らに、誰かがいるのに気づいた。

「ようやく起きたね。全く、お前さんは寝起きが悪いんだから」

その声で判った。あたしは、バツと上半身を起こした。目の前には、皺だらけのおばあちゃんの顔。

「おばあちゃん……」

あたしはため息をついた。

「あたしは、シア。孫娘のシアよ」

少し大きな声で、ゆっくり、おばあちゃんに納得してもらおうように、話す。

「シア？ 孫？」

不思議そうな顔をしておばあちゃんは、あたしの顔をじろじろと眺めた。そして、しばらくの間考える仕種をした後、ぽんっと手をたたいた。

「ああ、シア。シアだね。そうだ、シアだ」

「そう、そうよ。シアよ」

死んだおじいちゃんと間違えてしまうなんて、てっきり進んだのかと思ってしまった。あたしはホツと安堵の息をついた。

ーが。

「……で、どちらのシアさんかね？」

にこにこ。人のいい笑みを浮かべて、おばあちゃんはそんな事を言っただった。

あたしはがつくりとうなだれた。まだ朝だと言っのに、体中にどつと疲れを感じてしまっている。

そのうち思い出すとは思うけど……孫娘と死んだ夫を間違えるなんて、あんまりじゃない？

確かに女のくせに剣を振り回したり、男にはさっぱりなのに同姓からはやけにモテているみたいだけどさつ。

……ううん。しかたないんだ。おばあちゃんは病気なんだから。

内心ため息をつきながら、のろのろと起き上がって着替えると、不思議そうにあたしを眺めているおばあちゃんを促して、部屋の外に出た。

家は、このトゥーリオ国の王都で宿屋を営んでいる。お偉いさんを泊めるような、そんな大層な宿じゃなくて、国を訪ねてくる旅人や商人が止まる、いわゆる一般大衆の宿だ。だから、人を雇う余裕は、実を言えばあまりない。家族だけでやっているから、お客さんはまだ寝ている時刻でも、それより早く起きて、先に食事を済まさ

なければならぬ。仕事もたくさんある。

正しく、日と共に起きだす毎日だ。

台所へ行くと、すでに父さん母さん、弟のタオがテーブルを囲んで、坐っていた。

「ねえ、姉さん。姉さんは王子様の花嫁コンテストには、参加しないの？」

挨拶もそこそこに、タオが席につくあたしに、身を乗り出して尋ねた。

「え？ ……あ、今日だっけ？」

「そうだよ。……でも、そんな事言ってるようじゃ、参加しないんだね。今度の内容なら、万一にも姉さんに可能性があるかもしれないのね。これ逃したら、どうすんのさ」

一カ月ほど前から街や国のあちこちで出ている公布の内容が、あたしの頭をかすめた。

気がついたら、手がテーブルの上のナイフを握っていて。

「……う。姉さん、ごめんっ」

あたしより二つ年下のタオは、まだ幼さの残る顔をサーと青ざめさせると、パツとテーブルの下に身を隠した。追い打ちを掛けようと、イスを引いたその時、おばあちゃんの呑気な声があたしの行動を止めた。

「エルセリオ王子は、もうそんな歳なのかい？ 早いものだねえ」

あたしとタオのやり取りを無視して、食事を始めていた父さん母さんの、スプーンを持つ手が、ぴたっと止まった。タオもテーブルの下から顔だけ出して、おばあちゃんを見た。

おばあちゃんの言う、エルセリオ王子というのは、現在この国の王様のことである。今回、もちろん花嫁を選ぶのは、その息子のシオン王子であって、エルセリオ王ではないのだ。

沈黙が広がった。

また進んだ　と言うのは、この場にいる全員 of 共通の思いだろう。複雑なあたし達の思いをよそに、おばあちゃんは無邪気な顔を

して、誰ともなしに尋ねたきた。

「今度の花嫁選びの内容はなんだい？」

答える声は、なかった。

あたし達家族は無言のうちに顔を見合せ、深い深いため息をついたのだった。

第一話 シアとおばあちゃん（後書き）

昔々に書いた話をほぼそのまんま載せてます。

世界の存続とか国をゆるがす大事件とかいうファンタジーの王道ではなくて、ライトなコメディ風ファンタジーなので、気楽に読んでください。

第二話 花嫁コンテスト

おばあちゃんはボケてしまっている。

一年前、バイスおじいちゃんが死んでから、少しづつボケーとしてることが多くなった、と思ったら、ものの見事にボケてしまったのだった。

これは、あたし達家族に大きな衝撃を与えた。

というのもボケる前のおばあちゃんは、肝っ玉の据わっている人で、年をとつても元氣一杯。面倒見もよく、聡明な女性だったのだ。忙しい父さん母さんの替わりに、あたしとタオを育ててくれたのも、おばあちゃんだ。

あたしは若い頃美人でモテたおばあちゃんに一番容姿も性格も似ている、と言われていて、それはあたしの密かな自慢でもあったのに。なのに。

今では、身内の顔も時々忘れてしまうし、わけの分からない言動はするわ、ふらりと何処かへいつていまうわ。完全にあたし達家族の悩みの種になってしまったのだ。

あたしは洗濯した最後のシーツを裏庭の物干しに掛けながら、そつと横目で、以前おじいちゃんがしつらえたイスに坐っているおばあちゃんを見た。

あたしが以前誕生日に贈った、何日もかけて苦勞して作ったショールを肩にかけて、うつらうつらとまどろんでいる。そうして寝ている姿は、いつも通りのおばあちゃん、とてもボケてるようには見えなかった。

けれど最近はずますますボケが進んでしまっている。だって身内の

あたしの顔が分からなかったくらいなもの。

悲しいったらありやしない。直してあげたいのに、お医者に見せても、治療法はないと言うし。とにかく、あたしはそんなおばあちゃんを見てるのがとてもつらいのだ。

あたしはため息をついておばあちゃんから目を逸らし、物干しに向き直った。

パンパンと竿に干した白いシーツの小じわをピンツと延ばして、ハサミで端を留める。一仕事終えたあたしは、ふうつと軽く息を吐いた。これをして、あと共同の井戸に水を汲みに行けば、午前中のあたしの仕事はお終いだ。

本当は、おばあちゃんから目を離すわけにはいかないのだけど、タオもないし、当のおばあちゃんは眠ってしまつて、目を覚ましそうにないので、あたしは桶を持って、そおつと裏口から出た。

裏口の外には、細い路地が通つていて、その道の奥まつた所に共同の井戸があるのだ。がやがやとにぎやかな音と声が響いてくるメINSTリートとは反対の方向に、あたしは足を向けた。

大通りはいつも賑やかだけど、今日はまた一段と人の往来が激しいようだ。

それもそのはずで、王子様の花嫁選びの催し物に参加するため、国中から若い娘がこの都に集まつてきているのだ。家の昨日の泊まり客だつて、実に半数が、若い女性だつた。

王様や王子様が住んでらっしゃるお城は、通りをずっと先に行つた小高い丘の上に、どーんと建つていて、都を見下ろしている。集合場所はそのお城だから、参加する娘たちはみんな通りを歩いて、または馬に乗つていくことになるのだ。

友達のアゼリアも行くつもりだと言つていたから、今頃はお城に向かつているに違いない。

あたしも一緒に行こうと誘われたけれど、それは丁重に辞退した。だって、選ばれる可能性なんて無いし、あたしには、三日もかけて家を空ける余裕はないんだもの。

井戸の周りには、誰もいなかった。いつもなら、あたしがくるのを待ち構えていたように、友達が数人くらいそこで井戸端会議をしているのに。

まあ、女友達がみんな出払っている原因は判っている。そしてその原因が、まるで人の替わりだともいうように、井戸の脇に立っていた。

それは、つい一月前に王子の名で国中に出された公布の看板だった。

『来る朧月の陽の昇る日 正午

世継ぎシオン・トゥルリオの名において

蒼き森のドラゴン退治を行う』

板に打ち付けられた羊紙に大きく書かれた文字。その文字の下に、細かな事項が幾つか箇条書きで書かれていた。今、この公布が国中の人が集る場所 広場や井戸、公共の建物の前などに立てかけられているのだ。

あたしはその大きな文字をそつと順番になぞった。

朧月は今月のこと。陽の昇る日というのは、王子様の誕生日の比喩だ。明確な日にちを書かなくても、この国に住んでいる者ならば、王子様の誕生日くらいはみんな知っている。

『ドラゴン退治を行う』なんて、まるで集めているのは男子のように見えるけれど、王子の名において、という部分があるってことは、当然これは王子の花嫁選びの内容なのだ。

この公布の意味を要約すると「今月の王子の誕生日の正午、王子の花嫁選考会があるよ。今回の内容は、蒼き森にいるドラゴン退治で、見事なし遂げた人が、王子の花嫁だよ」という風になる。

ちなみに、王子は今月の誕生日で十七歳になる。

この国にはなぜか、世継ぎは十七の年に伴侶を定めるという法律があつて、現在の王様もその前の国王も、ずっと十七歳の時に相手を選んでいたのである。しかも公に、国民の前で選ぶことがさだめられている。

これは他の国々にはない法律だった。

何しろ、相手の身分は問わず、貴族でも平民でも、この国の住人なら誰でも可なのだ。

王子妃っていったら大貴族の娘の中から選ばれるのがよその国では普通なんだけど。本当、わが国ながら大国のくせにトゥーリオって変わってると思う。

ところがぎつちゃん。

そう甘くはなくて、誰でも構わないかわり、人より何かしら優れた所がなければならぬらしい。

王子が提示した条件をクリアした者だけが、花嫁の資格を得るのだ。ということで、選考会、コンテストなるものが存在してしまうのだった。

でも、これはけっこう八百長みたい。

これもどういう訳か、代々の王子様にはちゃんと想い人がいて、その娘が選ばれるように、王子はその彼女が一番得意のものを、コンテストの内容にしようとするのだ。

前回 現在のエルセリオ王の場合、好きになったのは花屋の娘であつたため、コンテストの内容を「花の名前当て」にして、見事花屋の娘を選ばせたいらしい。その娘が今の、シオン王子のお母様、アレーナ王妃というわけ。

だから、今度の王子の提示した内容から、王子の好きな娘は女戦士ではないかという憶測が、国中に飛んだのだった。

それでも、その王子の隠れた相手より先にドラゴンを倒してしまえば王子の花嫁になれる、と思つた娘は多かつたらしい。朝も早よから城までの道は、慣れない手つきで剣や弓矢を持った若い娘達に埋めつくされたのだった。大通りから微かに聞こえてくるざわめきも、やはり女性の方が多いみたいだ。

本心を言えば、あたしはそのドラゴン退治に行きたかつた。

といつても、別に王子様の花嫁になりたいわけではなくて、その内容そのものに、あたしは興味を抱いてしまったのだ。

ドラゴン退治。聞いただけでワクワクする！

都の本屋では、冒険者たちの経験したことを描いた本がベストセラーに名を連ねている。

もちろんノンフィクション。他国と戦争があるわけではないこの国では、人々は刺激をそういう方面に求めるようになってしまったのだ。あたしもその口。

そういつた冒険談の中で、もっとも人気があつて、榮譽がある話だ、ドラゴン退治だ。

だから、王子の花嫁選考会の内容を知つて、行かないわけにはいかない、と思つたの。最初は。

けれど、ある事情によつて、行くのを断念したのだった。

事情とは、もちろんおばあちゃんのこと。

この花嫁選び、どうやら三日くらいかけて行われるらしいのよね。蒼き森つてここから距離あるみたいだから、かつてのコンテストのように一日で終了するつてわけにもいかないみたい。

だけどあたしはおばあちゃんの世話があるから三日も家を空けるわけにはいかないのだ。

もちろん行きたいといえば、家族は自分の負担が増えてもいいからと送り出してくれると思うけど、花嫁に選ばれる可能性があるわけでもないのに、単にドラゴンを見てみたいからなんていう動機では申し訳ない。

「だけど……悔しいなあ……」

小さく呟きつつ、あたしは井戸のふちにあつた桶を、井戸の中へ落とした。カラカラと滑車が回り、しばらくするとパシャンという水音が遠く微かに響いてきた。縄の端を手を取つて、今度はそれを力まかせに引っ張る。

いくら滑車がついてるといっても、水は結構重く、ようやく引き上げた時には、息が切れてしまつていた。腕も重たいし、手のひらも赤くなつて、ひりひり痛む。

それなのに、今度は汲んだ水を、家まで持つて帰らなけりやならないのだ。

「王子妃になったら、少なくとも水汲みはしなくて済むわよねえ」と、あたしは独りごちた。いつもなら、誰かしら人がいてお互い愚痴も言い合えるけど、今日は誰もいない。あたしの独り言は、周囲の壁と石畳の路に虚しく響き渡った。

「そうだね。水汲みは確かにしなくて済むよね」

突然、あたしの独り言に答える声が、家の壁に囲まれた狭い空間の空気を振動させた。

第三話 王子様登場

あたしはぎょつとして、せっかく引き上げた水を取り落としてしまった。桶と、その中の水は再び井戸の中へと消えていく。

「あつ……」

あまりのことに、あたしは振り返るのも忘れて、呆然としてしまった。

「おっと、これは失礼。驚かせてしまったかな？」

どこか笑いを含んだその声に、はっと正気に返ったあたしは、人の努力をフィにさせた原因に、キツイ視線を向けた。向けようとした。

が、その視線は、その人物に固定された時点で、驚愕の視線に変わってしまった。

たぶん、あたしが桶を引き上げるのに夢中になっている間に、背後に来たであろう人物は、二人いた。

いや、正確には二人と馬二頭だ。そのうちの後にいる一人は、灰色のフードを深く被っているために顔は見えない。

そして先頭にいるもう一人は　これこそが、あたしが驚いた理由だった。

明るい蜂蜜色の髪。紫の瞳をした青年。

あたしは、彼を知っていた。いや。正確には見知っていると言った方が妥当だろう。

「……シオン王子……？」

信じられない思いであたしはつぶやいた。

幻？ 他人の空似？

いや、でもこの顔はシオン王子だ。国事には必ず見ているこの国の王子様の顔。

もちろん催し物の時に国民の前に出てくる王子の顔を、平民であるあたしが間近で見たことはない。

でも王家フェチの友人アデリアの部屋には、このシオン王子の絵姿がいっぱい貼ってあって、否応無く記憶させられてるのだ。この顔に囲まれている中でお茶したことが何回もある。

端整な顔立ちにいつもやさしげな笑みを浮かべている王子様はこの国中の女の子の憧れの的で。もちろんあたしも例外ではなくて、こっそり一枚だけ絵を持っていたりする。

その顔が、今、あたしの目の前に。

でも、今度のこの騒ぎの張本人が、どうしてこんな時刻にこんなところに……？

あたしの不思議そうな、というより怪訝そうな視線を受けて、シオン王子はふっと笑みを浮かべた。そして、馬の手綱を引きながら、あたしに近寄ってきた。その王子の後を従者か護衛らしいフードの男が続く。

おおっと？

ビックリして一步後退したら、すぐに井戸にぶつかってそれ以上動けない。回り込んで逃げるわけにもいかず、あたしはやむなく近づいてくる王子様と対峙する羽目になった。

んーと、我ながら見栄っ張りだとは思うけど、内心動揺しているとはいえ高貴な人の前で小さくなったり、慌てたりしたくはないじゃない？

あたしは極めて冷静に 外見上は 王子の視線を受け止めて、次の言葉を待った。

後から考えると、この時のあたしの態度は堂々としすぎて、逆に高貴な人に対しては失礼だったかもしれない。何しろ、王子様を前にして、会釈もしなかったのだから。

半ば挑むような顔をしているあたしの顔を、王子は珍しいものでも見るように、しげしげと眺めている。興味深そうに、でも、どこか計るような目で。

あたしの何が、王子の心にふれたのかは知らないけれど、次の瞬間、彼は微かに、だけど満足そうな笑みを浮かべたのだった。

「な、なにか御用ですか？」

あたしはとうとう、無礼な言葉を吐いた。だけどシオン王子は気にした風でもなく、あたしのすぐ前に来て、

「この馬と僕に、水を分けてもらえる？」

と、言った。

あ、あれ？

あたしは、どっと力が抜けた。水ね、水。一体何事かと思ってしまっただけ。

「はあ……」

とあたしは気の抜けたような返事をして、横にずれた。そして、もう一度、井戸の水を汲もうと縄に手を掛けた。

が、その縄を馬の手綱から手を放した王子が取った。

「いいよ。女性にさせるわけにはいかない。僕が自分でやる」

と止める隙もなく、さっさと縄を引っ張り始めてしまった。あたしの三分の一の速さで、しかも軽々と王子は水を汲みあげた。

あたしがボーッと見てる間に、彼は汲み上げた水を手ですくって口に含み、あとは馬の前に桶を置いて、馬の好きなように飲ませた。

その時になって、あたしは、王子本人の前でとんでもない独り言王子妃になれば水汲みしなくてすむ云々　を言ってしまったのを思い出し、青ざめた。

できるなら、井戸の中に入ってしまいたいほどだ。王子が見てさえなければ。いや、それよりも、さっさと家に帰りたい。もうこれ以上居たくない。

「君は、ドラゴン退治に参加しないの？」

不意に話しかけられ、あたしはどきつとした。

「ええっと……参加はしません」

「どうして？　面白いのに」

面白い、ときたまんだ。あたしは、何と返事したらいいのか迷いつつ、気がついたら口がすべっていた。

「シオン王子……そんな質問するなんて、意地が悪いとは思いません」

ん？」

また無礼な言葉を言ってしまった……と思っても後の祭り。どうしてこうも正直に言っちゃうんだろつか、あたしは。

でも、本人を目の前に、何を言えればいいと言うんだ。

貴方の花嫁選びに参加したくない　言い換えれば、貴方の花嫁なんかにはなりたくないわよと言っているのにも等しいことを？

何をいつても失礼に当たる。いや、今のあたしの台詞も充分失礼だけ。

「あつと、ごめん。だけど、君はああいうの好きそうに見えるんだけど……。もちろんドラゴン退治の方がね」

怒りもせず、あっさり言った王子の言葉にあたしは目を見張った。どうして、分かるんだろ。

「あ、図星？」

くすくす、王子は笑う。

「なら、来ればいい。なかなか見られないものが見れるよ？　今からいけば、充分間に合うし」

と言う王子の様子は、どうも花嫁を選ぶ、というよりは、冒険を前にしてワクワクしているとしか思えなかった。

「行けないの。行きたくても」

敬語を使うのもすっかり忘れて、あたしはつぶやいた。

王子の言葉は、心が揺らぐほど冒険心を煽ったけれど、おばあちゃんのことを考えると、どうしたって行けない。

「どうして？」

と王子が前と同じ台詞を口にした時、今まで一度も言葉を発しなかった、灰色のフードの男が、突然言った。

「王子。そろそろ行かなければ……」

馬は既に水を飲みおわっている。王子が残念そうに、あたしを見ながらうなずいた。

「ああ。分かった……」

鐙に足をかけ、ひらりと栗毛の馬の背に乗る。その流れるよう動

作は気品にあふれていて美しい。

見とれていると、王子は馬上からあたしを見下ろして笑みを浮かべる。

「それじゃ、お嬢さん、水をありがとう」

優しい絵姿そのものの笑み、なのだが。

気のせいだろうか、何か含みがあるような気が……。

その笑みのまま少し前かがみになって、びっくり眼のあたしを覗き込んでつぶやく。

「また後で、ね」

そう言った直後、王子は、灰色のフードの男に何やら意味深な視線を送った。ようにあたしには見えた。男が微かにうなずく。それを確認した後、王子は元の姿勢に戻り馬を方向転換させ、あつけにとられるあたしを尻目に、大通りに向かって走りだした。

ええと・・・今、何言われた？

また後で、とか言われたような……。でもあたし、コンテストに参加しないって言ったのに。

あつという間に姿が見えなくなった王子を混乱したまま見送った。あたしは、フードの男がまだその場に残っていたのに気付いた。

あたしは、王子が走り去った方向と、男を交互に見ながら、言った。

「あの……王子について行かなくて、いいの？」

「うちの王子なら大丈夫」

と、答えが返ってきて、あたしは始めて、フードに覆われて見えないものの、この男が思ったより若いことに気づいた。

「お忍びでよく来ているからこの辺りの地理に詳しいし、一人でふらふら出歩くことも慣れてますからね」

淀みなく言いつつ、その物の言いにはどこか棘あるような、ないような……。

どうやらあの王子様はお忍びで一人で出かけてしまい、周囲の人を慌てさせているようだ。

「ところで」

フードの男はブルルと震えて身じろぎをする馬をなだめるように撫でてから、シアの方に向き直った。

「君こそ、ドラゴン退治に行かなくていいの？」

行きたくても行けないと言ったからか、どうもこの主従はあたしの不参加理由が気になるようだ。

「王子といい、あなたといいあたしを行かせたがるわね。……だつて、うちには病人がいるんだもの。行けないわ」

「病人……？　ならよけい丁度いいじゃないですか」

男がフードの下で笑った　ような気がした。はつきりとした笑いではなく、微笑んだような、そんな気配が伝わってくる。

そして、一拍おいて、今度はそのフードの中からあたしを真っ直ぐ見て、言ったのだった。

「龍はね、どんな病気も治せるモノをもってるんですよ？」

その台詞は、まさに青天霹靂。地獄に仏。

「ほ、本当！？」

男は、ゆっくりとうなずいた。

「ええ。……龍の髭、って知ってますか？」

そして、その一時間後。

お城への道を急ぐ、あたしの姿があった。

第四話 蒼き森へ

お城の前は若い女達で埋めつくされていた。

大体貴族の娘は馬に乗っていて、従者も連れているから、人数は倍増だ。

でもあたしを含め、ただの庶民は馬を割く余裕なんて無いから、もちろん徒歩だった。

正午ぴつたり、あたし達は城を出発した。目指すは、蒼き森。

この国最大の森は、城をはさんで、都とは正反対の所を約半日行った所にあり、来た道とは反対へ、なだらかな丘を下っていくのだ。でも何しろ人数が多いので、恐ろしく長い行列になってしまっている。後ろの方へついたあたしは、先頭が丘を下りきった時に、ようやく歩きはじめることが出来たのだった。

この行列に、王子様本人はいない。

彼は、先に森の入口の広場にキャンプを張って、待っている、ということだった。つまり、あたしが井戸で会った時、あの王子様は森へ行く途中だったわけだ。

でも、判らないのが、どうして反対の道 都にいたのか、ということだ。しかも、従者はあの灰色のフードの男一人。その彼とも別行動を取ってしまったて、いったい何を考えているんだろう？

なにか、あるような気がするのは、果たして気のせいだろうか？それに、今さらだけど、どうもあたしは王子様とあの男にうまくノセられたような感じがする。

「……ま、いいか」

あたしはようするに、おばあちゃんのボケを治せる薬を取ればいいんだ。

王子にもあの男にも、あたしを騙す必然はない。だとすると、薬の件もそれなりに信用できるってことだ。

龍の髭。あの男は、そう言った。

あたしは、初め、それは嘘だと思った。だって、どの本を見ても、ドラゴンに髭があるなんて描写は出ていない。

その時、あたしは髭、というから鼻の下にある髭を思い浮かべていたのだけれど、彼が言ったのは、その髭ではなく、顎の下、つまり、喉の所にある髭のことだった。

その髭を煎じて飲めば、何の病気でも治せるだそうで、試しにあたしはボケでも治せるか、と聞いたら、彼は『もちろん』と答えた。これこそまさに、天の助けってやつだ。だいたい、竜の鱗とか角だとかは良薬として有名だから、その髭だったら、ボケだって治せるかもしれない。

あたしはもう、水汲みどころじゃなくて、家へ走り返って、慌ただしく支度をした。

約三日分の食料、簡素な調理器具、一人用のテント、毛布。そして、武器も忘れてはいけない。

ドラゴン退治をするなら、弓も必要だけど、今回あたしはそれに関しては傍観を決め込むつもりだったから、あたしが手に取ったのは、長さが一メートル程の、おじいちゃんの形見の剣だけだった。

おじいちゃんは狩人だった。

お父さんが、剣や弓を嫌って、宿屋を始めてしまったけれど、病気になるまでは、よく近くの森へ行って、鹿やら兎やらを捕ってきたりしていた。

おじいちゃんをよくあたしに、剣の使い方やら弓の打ち方などを教えてくれた。

タオはまだ小さかったし、お父さんはアレだったから、あたしに教えるしかなかったみたい。でも教える時のおじいちゃんはとても楽しそうで、あたしも、教わるのが楽しみだった。

だから、こんなになってしまったのかしらね。

喧嘩だって一度も負けたことはないし、前にゴロツキから助けてあげた商人さんたちに冗談だか『護衛に雇いたい』と依頼されたこともあるくらいだ。

自慢じゃないけど、この花嫁候補のお方々よりは、遙かに剣は使えるハズ。

まあ、そもそも普通の娘は、剣なんて持たないけどね。

持つのはせいぜい包丁ぐらいなもの。一般の年頃の女の子は、糸を紡いだり、布を織ったり、料理をしたり……。ともかくも、畑仕事をしてない限り、家のことをやるのが普通なのだ。

もちろん、あたしも家のことはやる。料理もとりあえず出来る。

ところが、残念なことに、裁縫関係はあたしは一切駄目な女の子だった。それよりも、剣を振っている方が得意。でも、これって、女戦士とか冒険者になるならともかく、お嫁にいくのには全く不利。まだ十六歳だから、それほど問題にされていないけれど、両親も家族も皆心の中では、このままでは絶対売れ残るに違いない、と思ってるようだ。

今朝、タオが失礼にも、あたしに王子様の花嫁になれる可能性がある、なんてことを言って、しきりに勧めていたのは、剣が扱えるという以外に、この機を逃したら誰もあたしなんて貰ってくれない、と思ったからに違いないんだ。

結局、来てしまったし、両親もタオも、玄関でバンザイ三唱までして送ってくれたけれど、あたしには王子様の花嫁になる気はこれっぽっちもありはしない。

あたしはドラゴン退治は見るけれど、決して手は出さないつもりだ。

だってあくまであたしの目的は、龍の髭なのだ。誰か、玉の輿希望の女の子でも、隠れた王子の相手でも、とにかく誰かが龍を討ち取ったら、あたしはこっそりと髭を取ってくる。そうして、すぐ家へ取って返して、おばあちゃんに飲ませるのだ。

おばあちゃん。

てくてくと重たい荷物を背負って歩きながら、あたしはおばあち

代々の王が、民衆の中からいつも王妃を選んでいるせいなのか、王や王子の人柄なのか、この国の王族は驚くほど国民に人気がある。シオン王子だって、女だけじゃなく男からも結構好かれているようだ。

だけど、この日だけは違った。若い適齢期の女の子が目の前に山ほどいるのに、その全部が（というわけじゃ、本当はないけど）王子様の花嫁志願なのだから。

この日ほど、人望厚い王子が男達に憎まれた日はなかっただろう。うらやまし気な（あるいは恨みがましい）視線を受けつつ、あたし達は黙々と蒼き森目指して歩いていったが、行程の半分を行った辺りから、次々と脱落者が現れ始めた。

その女の子は、殆どが重たい荷物を背負って歩いていた平民の娘達だった。道端でヘタリと座り込む人、近くの農家にお世話になりに行く人や何かで、夕方、赤い夕日が大地を血の色に染める頃には、あつとびつくり徒歩の人は初めの半分まで減ってしまっていた。

もともと貴族より平民の方が参加人数が多いから、実に三分の一以上が棄権してしまったことになる。

現地集合にしないで、半日歩きづめにするあたり、もしかしてもう選考会は始まっているのかもしれない。

まさしく体力勝負。気力勝負。あの妙な王子様が考えそうなことだ。

棒のようになった足を、ただ前へ進ませることだけに専念していたあたしの脳裏に、やわらかな金の髪と、紫の瞳が浮かんだ。

その中で王子は、人なつこい。でもどこか含みのある笑みを浮かべていて、あたしは何だか、とても……なぜかとても憎たらしくなってしまったのだった。

あたしに気軽に来い、だなんて言っただけなのに、自分だけさつさと馬で蒼き森まで行ってしまっただけ。くやしい……くやしい。

絶対行き着いてやる。そして、竜の髭を手に入れていやるんだから。

だから。

おばあちゃんの為という目的の中に、王子に対する意地まで加わってしまった後は、あたしに怖いものなんて無かった。

足の疲れも気にならなくなってしまつて、ずんずんと進んでいく。人間、気力次第でどうなるものだなあ、としみじみ思いつつ、道端の脱落者を避けながら進んでいくと、その前方に見えた脱落者の中に見知った顔があつて、あたしはぎくつとしてしまった。

友達のアゼリアだつた。あたしが気がついたのとほぼ同時にあたしに気づいたアゼリアは、息が切れているにも係わらず、大きな声であたしの名を叫んだ。

どうしてあたしがここにいいのか、さぞ聞きたいだろうし、きつと文句とかも言いたいだろうけど、ここでアゼリアに係わつていたら、あたしまで脱落してしまふ。

あたしは心を鬼にして、アゼリアの前を笑つて手を振りながら通り過ぎた。

「シアの裏切り者おゝ！」

怒っているのか、夕日のせいかわ、真っ赤な顔をして叫ぶアゼリア。でもあたしは耳を塞いで知らんぷりを決め込んだ。

やがて、アゼリアの声も聞こえなくなり、日が遠くの山並みの向こうに消えて、空も闇色に染まりはじめた頃、ようやくあたしたちは、蒼き森の入口のキャンプ地に着いたのだつた。

第四話 蒼き森へ（後書き）

シアは実は美人。

腕っ節もいいし、世話好き&姉御肌なので女の子にモテまくりです。こうしていつも女の子に囲まれているので、実は男の子はシアに近づけることができないでいるだけ……だっ तरीします（笑）

第五話 蒼き森での夜―前編―

蒼き森は、この国のほぼ中央に位置している。

誰も中心部まで行き着けたことのない、不可侵の森には、何時、誰が言いはじめたのか、ドラゴンが住んでいると噂されるようになった。

なぜ、蒼き森という名称がついているのかといえば、時々、不意に、夜でも昼でも森全体が青く仄かに光るためである。どうして光るのか、今まで誰も説明出来たものはなく、蒼き森は、この国最大の謎とされ、その存在そのものが神秘に包まれている所だった。

豪胆なおじいちゃんですえも、この森には近づかなかったそうだが、その森の入口に、今孫のあたしがいる。なんだか、妙な気分だ。

森は、今は青く光らない。ただ、静かで、空と溶け合うような、闇色に包まれている。

空と森の高くそびえ立つ木々を分ける唯一のものが、星だった。

あたしは、ボーツと空と真つ黒な森を眺めた。

こうして見ると、普通の森と変わらない。ドラゴンがいたり、青く光ったりするなんて、信じられない……。

「ちょっと、あなた。邪魔よっ」

不意に鋭い声で怒鳴られて、あたしはハッとした。

キャンプ地の入口近くで、ボーツと突っ立っていたあたしの横で、大きな荷物を抱えている女の子が、あたしを睨みつけている。

いけない。ボーツとしちゃった。

あたしは首をすくめて、その場からそそくさと逃げだした。

明日になれば、いくらでも見れるのだから、今は場所を確保してテントを張ることの方が先決だ。

キャンプ地の中心には大きなテントがあった。

誰に聞くまでもない、シオン王子のテントだ。

おそらく中には、たくさんのランプがあるのだろう。布地を通して、明るい光が辺りを照らしている。入口には、二人の見張り。ふんつ。いい身分だ。

夜になって、辺りは真つ暗になってしまったが、キャンプ地には所々に篝火が燃えていて、間違つて森に入ってしまうことはないし、火の近くなら、いろいろとものがよく見える。

あたしは篝火を頼りに、程よい所を見つけ出した。

近くには、キャンプ地を突っ切つて森へ流れる小川があつて、低い木が密集して出来た草むらもあつた。

これは、薪にぴつたりなのだ。

篝火も近く、王子の明るい大きなテントからも、そう距離があるわけではない。

あたしはその場所に、小さな一人用のテントを張つた。

あたしが持つてきたのは、高さの低いテントだった。

座高よりやや高いというくらいで、這つて入らなければならないものだったけれど、あたし一人にはこれで充分だ。

寝場所を確保したあたしは、次に食事の支度を始めた。

昼食もとつてないから、お腹はぺこぺこだった。

近くの草むらから薪にする分だけを切り取り、近くの小川から水を汲む。急いで支度したから、持つてこれたのは、すぐに食べられるようなものばかりだった。羊の干肉と固いライ麦のパンを袋から取り出す。今日の食事は、これらにお茶だけ。

火に水をくべて、お茶を沸かす。

と、そこで、あたしは、このキャンプ地に異様な緊張が漂っているのに気づいたのだった。

確かに、今はどこでも食事を用意をしていて、人があつちこつちへ移動してはいるけれど、その忙しさの中に、何だか、得体の知れない雰囲気の流れているのだ。

何かの先触れにも思えるそれは、今までになくあたしの肌にぴり

つと来た。

そう、まるで、獲物がくるのを気配を消して息をひそめて、待っているような、そんな感じ。

そんな緊張感が、このキャンプ地全体を押し包んでいた。

「？」

表面的には、何も変わらない。なのに、何かが変なのだ。

あたしは食事をしている間も辺りに気をくばり、その原因を突き止めようとしたけれど、駄目だった。

人を呼び止めて聞いても、きつと答えてくれないだろうし……。

夜も更けて、次々と焚き火が消えていっても、それは変わらなかった。それどころかもっとひどくなっているようにも感じる。

いったい何だろう？

テントに入って、毛布を被りながら、あたしはあれこれ考えた。

本当は、明日のために早く寝たかったのに、不穏な空気のせいで意識が眠ってくれない。

それにどうやら、外では何か、人の移動するような気配がしていた。

足音を消して、そろそろと誰かが動いている。それも一人じゃない。

行った、と思うと、また何処からか人がやってきては、あたしのテントの側を通っていくのだ。

それも　どうやら、キャンプの中心地、つまり、王子のテントの方向へ行ってるようだった。

何があるんだろう？

と思わず上半身を起こした時、すぐ側の草むらからガサツという音が聞こえてきて、あたしははっとしてそばに置いておいた剣を手にとった。

その気配は、テントを通り過ぎていくあの足音とは違って、気配を消し、キャンプの中を伺っているようだった。もちろん、獣じゃない。

誰もいないはずの森の方角に、ランプの光が揺れているのが、テント越しに見えた。

あたしは剣を握ったまま、テントの外に這って出た。

盗賊かもしれない。女だらけのキャンプに目をつけて、やって来たのかもしれない。

ごくん、息を一つのんで、あたしは意を決して、声を掛けた。

第五話 蒼き森での夜―後編―

「誰……っ？」

「しっ。静かに……」

気配を押し殺した低い声が返ってきた。

その声には、聞き覚えがある。

かさつと草むらをかき分ける音がして、ランプを手にした人物が、這い出て来た。

げっ、とあたしはつぶやいてしまった。

それは、シオン王子だったのだ。

王子は持っていたランプをあたしに近づけた。

あれっ、と驚いたような顔をする。

「君か……ちょうどいい。隠れさせて欲しいんだ」

必死の形相でそう言つと、王子はあたしの返事も聞かずに、あたしのテントにもぐり込んでしまった。

「ちょ、ちよつと、ちよつと」

王子につられて、声を小さくしたまま抗議の声を上げ、あたしもテントに入った。

というのも、テントの側を、誰かが通り過ぎていこうとしたからだ。

王子は気配を殺して、その人物が通りすぎるのを待った。

外に出て判ったけれど、やっぱり外を王子のテントに向かって歩いているのは、女の子たちだった。「ふうっ」

王子は気配が通り過ぎるのと同時に息をついた。何だか、この異様な事態がどういふことなのか、わかったような気がした。

「みんな、大胆だね。……その大胆さを明日も出してくれるといいんだけど」

王子は、そう言って苦笑した。
「やっぱり、とあたしは内心思った。」

つまり、この異様な緊張というのは、参加した女の子たちが王子のテントに夜這いを掛けにくくためだったのだ。

王子に例え想い人がいたとしても、既成事実があればどうともなる、と思つた人が沢山いたってことだろう。

女の子って怖い……。

「逃げてきたのですか？」

「そう。僕の替わりを人にさせて、いるように見せかけてる。で、僕自身は野宿しようと思つて、抜け出したんだ」

「獣が出たりしたら……」

「大丈夫」

と王子はやけに自信たっぷり言い切った。

「襲われたりなんてしない。女の子は別だけどね」

王子はあたしのテントで胡座をかいて坐っている。一人分のテントに二人入っているものだから、狭いつたらありやしない。

なのにこの人ってば全然遠慮しないんだよね。

人のテントに無理やり潜り込んでいるというのに、態度がでかいなあと思つのは不敬罪でしょうか。

「だけど、やっぱり来たんだね」

口調を変えて、王子は言つた。ランプに照らされた顔には、意地の悪い笑みを浮かべている。

あたしはふんつと顔を背けた。

「ドラゴン退治のためじゃないわ。あたしはおばあちゃんの病気を治せるっていう、竜の髭を取りにきたのっ」

「龍の……髭？」

「そうよ。そう、あなたの従者が言っていたわ」

「お祖母様、病気なの？ 何の？」

「ボケ、なの。ボケてしまつてるの。それでどうしてもあたし、おばあちゃんを治してあげたいの。あ、そうだ。誰かがドラゴンを退

治したら、その髭、あたしが貰っていい？」

あたしは一気にたたみ掛ける様に言って、王子に詰め寄った。でも王子は、何故か難しい顔をして不意に黙りこんでしまったのだ。

ムムム？

なんだろう、あたし変なこと言ったかな？

あ、もしかして、王子も髭が欲しいんじゃないのかしら？ 誰か、大切な人が病気とかで。

だから、ドラゴン退治をするなんて言ったのかもしれない……。

あたしはそう思って、王子の次の言葉を待った。

駄目、と言われたって、あたしはひくつもりはなかったけれど。

そんなあたしの前で、王子は、ひどく困ったような表情をした。

「そうか。ボケを治したいのか……。でも彼、ロイは言わなかったの？ 今度の相手のドラゴンは普通言われている恐竜型の竜じゃないってこと」

「え？ どういうこと？」

「この森に住んでいる竜は、神龍なんだよ。君の知っている竜とは少し形態が違って、一般にはほとんど知られていない、伝説の龍」

そこで王子は言葉を止めた。

また一人、テントの前を女の子が足音を忍ばせて、中央のテントへ向かって通ったからだった。

消すね、と小さく言っていると、王子は持っていたランプの火を吹き消した。

とたんにテントは真っ暗になる。

だけど、近くに篝火があったから、かろうじて、王子の姿がうつすらと見えた。

「神龍はこの世に六体しか存在していない。大地と同時にこの世に誕生し、永遠に死にもしない。神と同じだ。この大地に生きる者にはね。……だから、彼らを神龍と呼ぶんだ。僕は偶然、城にある文

献を見て、彼の存在を知ったんだけどね」

そこまで王子が言った時、あたしはすっかり青ざめてしまった。

そんなすごいドラゴンなんて、あの男、一言も言っていなかった。いや、それよりも、そんな神様みたいな龍を退治しようという提案をするなんてっ。

あたしはぎつと王子を睨みつけた。

「永遠に死なない、という龍を、どうやって退治するっていうのっ」
「でも不老不死ってわけじゃない。方法は、きつとあるよ。ふふっ、でも、誰も退治できなくてもいいけどね」

と王子は含みのある笑いを浮かべた。

そこで、あたしは怖い考えに行き着いてしまったのだった。

「シオン王子。も、もしかして、ドラゴン退治なんてことにしたのは、誰も退治出来ないことを見越して」

王子は答えなかった。

でも、舌を出していたように見えたから、きつとそうなんだ。街で会った時の様子や、今の言動を見るに、まったく花嫁を選ぶつもりはないに違いない。

だとしたら、ここに集まった女の子たちはいい面の皮だわ！

「それって、酷い。最低っ」

「まあまあ、そんな怒らないで。出来ないとは限らないんだから」

「だって、龍の髭がっ」

「もし誰も退治できなかつたら、僕が龍に頼んであげるよ。神龍は、頭も人間より遙かにいいし、話しもわかるんだから」

あたしはギリギリと齒を食いしばった。

それはとても有り難い。どっちにしても、髭は手にいれなくちゃならないんだから。

だけど、なんか気に入くわない。少しばかり腹が立つ。こんな苦しい思いをして、半日歩いてきたのに、本人には花嫁を選ぶ意思がないなんて、本当にふざけているわっ。

「……誰かがきつと退治するわよ。そうすれば、あなたの力なんか借りずに、龍の髭が手に入るわ……」

あたしは呻くように言った。

と、その時。

青い光が、パーと差し込んできて、あたしと王子の二人分の影をテントの中に作った。

それはほんの一瞬のことだった。だけど、あたしは確かにテントが、いや、森が青く光ったのを見たのだった。

目に刺すような光ではなくて、包み込むような、不思議な光……。

「い、今のが……？」

今の今までの腹立ちも忘れて、あたしは息をのんで王子に尋ねた。再び薄暗くなってしまったテントの中で、王子はゆっくりとうなずいたみたいだった。

「あれは……龍が歌っているんだよ。大地の歌を。……それに反応して、森が光るんだ」

その言葉に反応したかのように、森が再び光った。

青い光がテントに差し込んでくる。

青、青、青。

あたしの顔も、体も、青く染まっている。そして、王子の。

あたしはどきんとした。光の中に、一瞬はつきりと見えた、シオン王子の、顔。

王子は、微笑んでいた。

でもそれは、含みのある笑みでも、華のような明るい笑顔でもない。やわらかく、優しく、そして夢見るような奇麗な微笑み、だった。

青い光は、すぐ消えてしまって、王子の顔も見えなくなってしまうけれど、何故だか、その王子の笑みが、スーッとあたしの心にしみ込んできた。

どきどきした。胸がやけに騒いだ。

あたしってば一体どうしたっていうの？

今まで男の人といってもそんな反応したことなかったのに
でも。

暗くなつて見えなくなつても、隣のシオン王子がまだ笑みを浮かべている気配がして。

それがなぜかとてもうれしくて。

あたしもいつの間にか笑みを浮かべていた。

青い光が終わつても、あたしは何も言わなかった。

いつまでも、王子のあの微笑みを胸に留めて置きたかったのだ。
だけど、その沈黙を王子が破った。

「機嫌がいいんだ。歌うくらいだから」

王子の声は、何だかとても弾んでいる。わくわくして、どうしようもないという声音だ。

「歌うと……機嫌がいいの？ 龍が？」

「そりゃあそうだよ。機嫌の悪い時に歌を歌う人なんて、いないだろう？」

「まあ、そうだけど……」

あたしは耳を澄ませた。その龍の歌が聞こえてくるかと思っただけれど、聞こえるのは、キャンプ内のちょっとしたざわめきと、隣にいる王子の息づかいだけだった。

「聞こえないわ」

「僕には聞こえる」

「……ずるい」

「ずるくはないさ」

王子は、声を出さずに笑ったようだった。

「明日になれば、嫌でも龍と御対面じゃないか。……頑張つて、退治するんだよ」

「退治なんてしないってば。見るだけ」

「でも、誰も出来なかったら、君は直接手を出すしかないんだろう？ 僕経由で龍の髭を手に入れるのは、嫌そうだったみたいじゃないか」

あたしはぐつと言葉に詰まってしまった。

うつ、話題を変えなくては……。

「……あ、あたしだって、龍も目前にして、逃げてしまいかもしれないわ。怖くて」

「君は大丈夫だと思うよ。腕も立ちそうだし、勇気もある。それに……優しいよ。自分のためでなく、他人のためにこんな所まで来るんだもの……」

「それは……」

あたしは少しばかり赤くなって、俯いた。

この中が薄暗くて、見えないことを、今ほど感謝した事はない。

「……そんな手放しで褒められると、照れるじゃないの……」

思わず口に出てしまった言葉に、王子はふふつと笑った。

あらら、ちよつといいムード？

と思ったのもつかの間、王子は急に胡座を解いて、狭いテントの中に横になってしまった。

「もう寝たほうがいいよ。明日も大変だから……。今日も疲れただろう？」

「ち、ちよつと、ここで寝るの？」

あたしは慌てて言った。

だけど王子は平然と、しかも当然のように、

「だって、他に行くところある？」

と聞いてきたもんだ。

あたしは何て言ったらいいのか、途方に暮れてしまった。

若い男女が狭いテントの中で、一夜を過ごしていいものだろうかとか、あれこれと考えが頭の中を巡ったけれど、当の王子はここで休むことに決めてしまったみたいだ。

あたしは、深いため息をついた。

「……後で不敬罪に問われるのは嫌だもの、ね……」

王子に、というよりは自分に言い聞かせるようにつぶやくと、あたしはテントの入口近くに置いてあった袋から、もう一枚の毛布を取り出した。

「有り難う」

「どういたしましてっ」

ただでさえ狭いののに、二人も入ったからもうギリギリもいいところ。ほとんどくつついた形で寝ることになりそうだ。こんな所を女の子達に見られたら、きつとあたしは闇討ちされてしまつに違いない。そんなことを考えながら、あたしも横になりかけた時、ふと気づいて、あたしは王子に声をかけた。

「ね。もし退治する前に、そこに着けなかったら、どうするの？」

「それは、大丈夫。そんな事あり得ない」

と、王子は又やけに自信たつぷりに言い切った。

この根拠のない自信はいつたどこから来るのかしら？

「……そういえば、文献調べただけにしてはやけに龍のこと知ってるわね。もしかして、もしかして、だけど。あなた、龍の所に行ったことがあるんじゃない……」

王子は答えない。両手を頭の下に組んで、あたしとは反対の方を向いていた。

黙秘権ってやつね。だけど……半分あたしはもう確信していた。

「明日……全てが終わったら、ね」

ぼそぼそ。王子は顔を背けたまま、つぶやいた。

あたしはそれ以上聞くのは諦めて、毛布を被って、横になった。すぐ横に王子の体があつて、狭いため、どうしても触れ合つてしまつ。

もうほとんど同じ褥にいるのと同じだった。それで、さぞかし緊張して眠れないだろう、と思ったのだけど、やはり疲れているのか、横になつてももの数秒であたしの意識は沈んでいった。

その、体と意識が離れていく、まどろみと夢現の中で、あたしは

王子の声を聞いた。

「明日は龍のところに着くけれど、あまり無茶はしちゃ駄目だよ。シア」

その声は、遠くからのような、近くからのようにも感じられた。低くて、小さくて、だけど、優しく耳に轟く。

あれ？ シア？

あたし、王子に自分の名前教えたかな…？

「……名前。どうして…？」

意識が遠くなっていく。沈んでいく。

あたしが覚えているのは、そうつぶやいた所までだ。

後は　王子が二言三言何か言っていたような気がしたけれど、でもそれは、夢の中でだったのかもしれない。

第五話 蒼き森での夜ゝ後編ゝ（後書き）

少し王子様を意識し出したシア。

第六話 王子と女従者

次の日、あたし達と、そして王子は、蒼き森にドラゴン退治に出発した。

あたしのテントのすぐ側から、王子を先頭に入っていったわけだけど、そこであたしは一つどうしても怪訝に思ったことがある。

それは、道だ。

朝、支度を終えて、時間の余ったあたしは昨日暗くて出来なかった、キャンプ地の散策に出掛けたのだ。

キャンプ地は一部が森に食い込む形であり、その三分の一が実に森に面していた。

あたしがテントを張った所もそういった場所だったわけだけど、その側にも、そして森に面した所のどこにも、道、というものが存在してはいなかったのだ。

これは確かだ。はつきり言って絶対。

だからあたしは木と木の間を縫って進んでいくものだと思っていたのだけれど、今、あたしが歩いているのは、確かに土の道だ。

あんなに乱立していたはずの木は左右に別れていて、ゆうに二人は並んで歩いていけるだけの広さがある。

あたしは、今日は列の真ん中あたりを歩いていて、先は見えなかったけれど、滞りなく進んでいるってことは、でも間違いなく道が存在していることで……。

あたしは怪訝そうに歩きながら、周囲をキョロキョロと見回してしまった。

誰か、その事に気づく人がいるかな、とも思っただけれど、皆平然と歩いている所を見ると、誰も気づいてないみたい。

皆、前から回ってくる王子様の情報を伝えたり、話したりで、とてもじゃないけど、森を堪能している人なんていなかった。

これは、龍の仕業かしら？

この突然出来た（らしい）道をずっと行けば、龍のいる場所に着けるのかしら。

王子は、絶対着けるようなことを言っていたけれど。

あたしはできれば王子に事の真相を尋ねたかった。けれど、王子は先頭にいて、聞きたくてもそこまで行けない。

というのも、貴族の娘さんたちが争って、争って、馬で王子の側を埋めてしまっているからである。王子様のお顔が拝見出来るのも、近くを行く貴族だけ。ついでに声を掛けてもらうのも。ってやつだ。けれど、王子様の情報はちゃんと伝わってきている。

顔も声も姿も見えないけれど、前から人づてで伝わってくる情報のおかげで、みんな今日の王子様の様子を知っているのだ。

情報といっても、王子様の今日のお召し物がどうか、どういう馬に乗っているとか、従者はたった二人だとか、機嫌がとても良さそうだとか、そんなものだけだ。

そして、その前から伝わってくる情報の中で、一つだけあたしの心に止めるものがあつた。みんなもそうらしい。

何故なら、その王子の二人の従者のうち一人は、女性らしいのだ。それって、つまり……あの可能性が高い。

王子の想い人。

従者にわざわざ女を選んでくるなんて、どうしたって、王子の恋愛の相手かもって思えるじゃない？

皆の話題はさっきからそれでもちきりだった。

あたしは首を傾げた。

だって、王子はどう見たって、花嫁を選ぶつもりはなさそうだった。

誰も、退治出来なくていい、とも言っていた。

なのに　　女を連れてるわけ？

……もしかして、王子は、その女性なら退治出来て、他の人間は出来なくていい、といった意味で言ったのかもしれない。

だって、王子本人の口から、花嫁を選ばない、って聞いたわけじゃないし、花嫁選考にわざわざ女の人を連れてくるんだもの。

そうとしか考えられないじゃない？

あたしは、ぽりぽりと頬を掻いた。

何だ、という気分になる。

何だ……ちゃんと、好きな人、いるんじゃないの。なら、ちゃんと言ってくればいいのに。

そんなに信用ないわけ。あたしって。

憤慨しかけたけれど、それもさっと消えて、そのかわり、何とも形容しがたい気分に襲われた。

落胆というわけじゃないけど、寂しいような、哀しいような、悔しいような。とにかく妙な気分。

どつと心が重くなつたようにも感じられる。

変よ。変。

別に王子なんて関係ないのに……。

「……………」

ぶんぶん、とあたしは勢いよく頭を振って、王子のことを頭から振り払った。

あたしの目的は、龍の髭を持って帰って、おばあちゃんの病気を治すこと。それ以外には何も無いもの。

次から次ぎへと耳に飛び込んでくる、王子の噂から意識を逸らすように、あたしは周りを見渡した。

森は、どこといって変わった所はなかった。

どこにでもあるような、普通の森だ。

龍の機嫌が悪いのか、青く光りもしない。

そのかわりに、葉と葉の間から差し込んでくる木漏れ日が、緑の見事なコントラストを作っていた。

どこかぼんやりとした、やわらかな薄い光りが、あたし達の足元を仄かに照らしている。

左右のどちらを見渡しても、ずっとそんな風景が続いていて、この森がどんなに広くて深いのか、物語っているようだった。

今の森は、神秘さも畏敬も感じさせず、ただ自然の奏でる調べが混ざり合い、調和し、生命のざわめきさえもが、荘厳で静かな空気に融けているように感じられた。

それは都では決して味わえない感覚だった。

昨日のような気負いが無いせいかもしれないけれど、ふっと肩の力が抜けていって、落ち着くような、そんな感じ。足も妙に軽い。

森に来るまでの田園風景が続く道より、ずっとこっちの方が楽しいのは、別にあたしだけじゃないようだ。

みんな、何だか和やかな、ハイキング気分で歩いている。

お喋りして、笑って、土の道を歩いて。

とにかくみんな、これがどこへ通じる道なのか、あたし達が何しにいくのか、すっかり忘れてしまっていた。

皆が、というよりあたしが、この旅がハイキングでも観光の旅でもないことを、思い知ったのは、このすぐ後のことだった。

第七話 熊と遭遇

この森が龍の住む、不可侵の森だといつても、それは人間だけのことであつて、森にはちゃんと小動物やら獣やらもいるのだ。

特に今は春だから、冬眠を終えた獣が餌を求めてうようよしているのである。

その中で、最も人間に危害があるものといつたら、やっぱり熊だろう。幸か不幸か、そんな熊が、突然襲つてきたのだった。

列があるとして、一番熊が襲うのは、前か後ろか真ん中か、と問われたら 答えは真ん中。何しろ列の前後には屈強な兵士たちが何人もいて守っているのだから。

この時、あたしはちょうど列の真ん中に居てしまったのだ。

熊は、あたしの右側、すぐ真横に現れた。

余りに突然、しかもすぐ傍に現れたものだから、あたしは周りの女の子達より、一瞬どころか、二テンポも三テンポも反応が遅れた。皆が一斉に金切り声で悲鳴を上げた時、ようやくあたしの頭は目の前にいるのが熊だということと、そしてその危険性に気づいたのだった。

カンペキに逃げる機会を逃してしまつたらしい。

傍にいた女の子たちは大半があたふたと逃げた後で、一人残されたあたしは、本当に、本当に途方に暮れてしまつたのだった。

しかも、どうやら今さらあたしは逃げる訳にはいかないようだ。死んだふりをするという手があるが、こんなに こんなにばかり視線が合つてしまった今ではそれも出来なかった。

あたしは微動だにせず、熊とにらみ合つた。

瞬き一つ、視線を少しでもずらせば、その場であの爪にばっさり殺られるのは目に見えている。

だから 外すわけにはいかなかった。

どくん。どくん。

鼓動の音がやけに大きく聞こえた。いつの間にか、周りの音も色彩も、消えていた。

視線のぶつ付け合いが、しばらく続いた。

それはほんの少しの間だったのかもしれない。

けれどあたしには、その時間がものすごく長く感じられたのだった。

脂汗に似た感じの冷や汗が、ツーと首を流れるのが分かった。

ふと気づくと、首に接触している襟が、じつとりと濡れている。

体内の熱を感じて、体全体が燃えるようだった。

誰か、助けてくれないかしら。祈るような気持ちでそう思う。

けれど、あたしはまた知っていた。

誰も助けてくれない。助けられない。

だって、周りにいるのは、今まで剣を握ったこともない若い女の子達だ。

ハラハラと見ているのが精一杯だろう。騒ぎに気付いた兵士が、もしくは王子と従者が来てくれれば、何とかなるかもしれないけれど、彼らがこの騒ぎに気づくまで、果たしてもつだろうか……。

あたしは、睨みつけながら、でも、そろっと手を剣の方へ延ばした。

熊に気どられないように、ゆっくりと。

誰も来てくれないなら、自分でやるしかない。

だって、あたしはこんな所で死ぬわけにはいかない。

龍の髭を手に入れるまでは……ううん、それ以降だって、しぶとく生きるつもりだ。

だから、熊に殺されるわけには、いかない。

……大丈夫よ。

大丈夫。できる。

剣の柄に手がかかる。あたしのしようとする事に気づいたのだから、急に熊がグウウルと唸りを上げた。

慌てて柄を握り、そして、引き抜く！

次の瞬間、本能的に身体が動いて横に飛びのいた。

あたしの斜め上の紙一重な位置で何かがブンツとつながるような音が聞こえた。

目の端にあたしが今までいた位置に尖った爪のある腕を振り下ろした熊の姿が映る。

あああ、危なかった！

人間相手とはいえ、場数だけは踏んでいるので、とっさに身体が動いてくれたのが幸いした。

でなければ今頃は熊に一撃死させられていたところだ。

体勢を整えたあたしは、剣を構え間をおかずに来るであろう第二撃に備えた。

その時。

どこかでヒュンという空気を切る音が聞こえた。
と同時に、熊の右目に矢がブスリと刺さった。

「……え？」

ハッと息を飲む。とたん、色彩と、周りの音があたしに戻ってきた。

女の子たちの小さな悲鳴。

ざわめき。

熊の傷つけられた唸り。

それらが一斉に戻ってきた。

あたしは、矢が飛んできた方を目で追った。

そこには、馬上で弓を構えている格好の、王子がいた。

きつと騒ぎを聞きつけて、来てくれたに違いない。

ホッと心の一部が安堵する。

来てくれた。もう大丈夫。

まだ熊を倒したわけでもないのに、あたしはそんなことを思った。目を矢で射られた熊はしばし狂おしそうに、唸りを上げていたけれど、その唸りに怒りを漂わせて、熊は今度は矢を射た方向、つまり、王子の方へ向きをかえた。

王子のいる場所はあたしと熊から離れていたけれど、手負いの獣は危ないかもしれない。

あたしは加勢しようと剣を構え、背を向ける熊に一撃を与えようと踏み出した。

が、後ろからぐつと肩を掴まれるのと同時に、抵抗する暇もなく、あたしの身体は後方に追いやられた。

「……え？」

数歩ほど、よろよろと後退する。

突然のことにびっくりするあたしの前に、黒い影が躍り出た。

藍色のマント、そして、耳に揺れる金の耳飾り。一瞬見えたのは、それだけだった。

あとは、あたしを庇い、熊の方を向いてしまっているから、分かんなかった。

左側の離れた所にいる王子の前には、同じく藍色のマントを肩に羽織った美丈夫な男が、王子を守るように、剣を握って立っている。その後ろで、王子は矢をつがえ、ゆっくりとそれを構えた。

数瞬の後、ヒュンという切れのいい音が空気を裂くように聞こえた。

熊のもう片方の目にぶすりと刺さる。

と、同時に、あたしの前にいた影が、掛け声もなく無言で跳躍した。

剣が木漏れ日に反射する。

バスッ。

何か、重いものを切ったような、鈍い音。飛び散る血。でも、それは、地面に着地したその影が、あたしの楯となってくれて、届くことはなかった。

助かったの……？

あたしは、しばらくの間、何が起きたのか分からなかった。我に返ったのは、目の前の大きな影が、あたしを振り返った時だった。

両耳に揺れる、細い棒状の耳飾り。

唇はほんのりと赤く、顔はうすく化粧をしているみたいだ。あたしは、その人が女性だということによりやく気づいた。美人で、けどどこか中性的な感じがする。

背はあたしよりも高く、きつと王子よりも高いに違いなかった。身体はマントと甲冑に覆われていてよくわからないけれど、きつととても鍛えられた身体をしているのだろう。

誰にいわれなくても、判った。この人が、皆の言っていた、王子の従者の女性なんだ。

こんなに美人で、腕も立つんじゃないや、きつと誰も適わないや。

あたしは半ば、呆然と目の前の女性を見つめた。

そんなあたしの視線を受けて、その人はふつと微笑んだ。

あたしは思わずどきん。

だって、艶やかに、華がパアと開くように笑うんだもの。しかも、自信に溢れた、笑顔。

その笑顔をあたしに向けながら、その女性は、あたしの前から離れていった。

歩き方も颯爽としていて、あたしだけじゃなく、周りにいた女の子たちも、ボウと彼女の後ろ姿を追っている。

彼女が視界から消えると、入れ違いのように、王子があたしに近づいてきた。

「シア。怪我はっ？」

馬上で、あたしを見下ろす王子の顔は、何だか青ざめているように見えた。

「う、うん。平気」

とあたしは答えながらも、心は先方に消えた、あの女性の方に向かつていて、心あらずの返事になってしまっていた。

その様子が判ったのか、それとも別の理由でなのか、王子は青ざめた顔をしながらも、怒ったように言った。

「あんな時は、真っ直ぐ向かわないで、逃げればいいんだっ。怪我したりしたら、どうするんだ？」

「王子？」

あたしは王子が怒るとは思わなかったので、びっくりして王子の顔をまじまじと見上げてしまった。

そこにあっただのは真剣なまなざし。

「……もしかして、心配してくれ、た？」

「当たり前だろうっ。……頼むから、あんまり危ないことはしないでくれ」

王子は、そこでふと言葉を切って、眉をひそめた。そして、怪訝そうに手綱から片手を外し、お腹の所にやる。

「ど、どうしたの？ お腹でも痛いのか？」

「……いや。気のせいかな？ ま、いいや。……とにかく、あんまり無茶なことはしないように。いいね、シア」

王子は、押しつけるようにそう言つと、あたしの返事も聞かずに、馬の頭を巡らし、さつさと走って行ってしまった。

その後を、控えていたもう一人の従者が追っていく。

後ろ姿を見送ったあたしは、訳がわからずに、周りの女の子たちの刺すような視線を受けながら、首を傾げてしまった。

昨日は、ドラゴン退治を頑張れなんて言っただくせに、どうして無茶するな、なんて言うのよ？ 矛盾してなあい？

「何が、いいね、よ」

口に出してしまつてから、あたしはハッとその場の雰囲気気づ

いて、慌てて口を押さえた。

というのもみんな、あたしを嫉妬の混ざった、険しい目で見ているのだ。

王子様に直々にお言葉を頂いた上に、名前まで知ってたとあっては、心穏やかではいられないのだろう。

あたしは苦笑しつつ、首をすくめた。

それでも、そんなに嫉妬が凄くないのは、やっぱりみんな、あの人を見ているからなのだろう。

王子の女従者。

綺麗で、背の高い、腕の立つあの人。

あの人と比べれば、あたしにその可能性があるわけないだから。だから、あたしに対する風当たりも、そう強くない。

歩きだして少しすると、みんなあたしの事なんて忘れてしまったかのように、またお喋りを始めた。話題は、あの子の事だけだった。

おばあちゃんのことだけ、考えていよう。

そう、思うのに、思っているのに。どうしても思いはあの子の所へいつてしまう。

美人だった。王子のすぐ傍らにいて、腕も立って 誰だって、

あの子だと思う。

あたしだってそう思う。

それでいいはずなのに、なんだか、すっきりしない。

何だか、くやしくて、悲しくて、淋しくて……すっきりしない。

「帰り、たい、な」

あたしは小さくつぶやいた。

このままここにいと、胸が潰れてしまいそう。

そう思うと、居たくなてなかった。虚しかった。家に帰りたかった。

でも そんな事はできない。

龍の髭を手に入れない限り、帰れるわけがないのに、でもあたしは、
今、心の底から、帰りたいと願った。

番外編 タオの独り言（前書き）

本編が終わってないのに、いきなり番外編です。

本編の主人公であるシアの弟のタオ君の話です。
といっても、シアネタですが。

番外編 タオの独り言

（ああ、まただよ……）

広場にある共有の井戸の近くで女の子に囲まれている自分の姉を見て、タオはため息をついた。

6〜7人はいるだろうか。

皆がタオの姉であるシアに話しかけている。

「シア、この間はゴロツキから守ってくれてありがとう。お礼にケーキ焼いたから食べてね」

「花屋のレイファに付きまとっていた不良を一喝してくれたんだってね。彼女、すごく助かったって。お礼言っただけで頼まれたよ」

「この前見損ねた芝居、再演するんですって。ぜひ今度は見に行きましょうよ……一緒に」

「あ、私も行きたい！（小声で）抜け駆けは許さないからねっ」

「裏通りでハバきかせてたやつら、シアが追っ払ってくれたんだってね。おかげで安心して通れるようになったわ」

等々。

彼女達は芝居の人気俳優を見るようなキラキラした目でシアを見つめている。

しかしシアはそんな彼女たちの異様な崇拜感情に全く気付いていないようだった。

「わあ、ケーキありがとう。家族みんなでいただくね」

「たまたま通りかかったら男に絡まれて、追い払っただけ。お礼なんていいのに」

「あの芝居、再演するんだ！ 今度こそ見にいこうね！」

「うん。みんなで芝居見にいこうよ」

「裏通りでお金巻き上げたり、女の子に絡んだりしていたからね、あいつら」

シアにしたら、友達と水汲みの時間におしゃべりしているつもりなのだろう。

だから、彼女たちがシアが井戸に水汲みに出てくるのをじっと待っていたのも、シアに近づこうとする男をにらみつけて威嚇しているという事実には全く気付いていなかった。

（なんて不憫な……）

タオの二つ年上の姉のシアは美人だ。

美人で器量よしで評判だった祖母の若い頃によく似ているらしい。すらりとしたバランスのよい肢体。出ているべき所は出ている、引っ込んでいるところはキュツと締まっているプロポーションはバツグンだ。

彫りの深いはっきりとした目鼻立ち。

濃い茶色の艶やかな髪。

性格だって良いし、何をやらせても一通りのことは出来てしまう。モテる要素満載の自慢の姉なのだが……。

困ったことにやたらと強いのだ。

ついこの間亡くなった祖父の影響で、幼い頃から剣や護身術を仕込まれたシアは、今では男も太刀打ちできないくらいの猛者^{もっさ}者になった。てしまった。

祖父にしてみれば祖母似のシアには自分で自分の身を守る技術が必要だと考えたのだろう。

だが、シアのレベルは自分の身を守るための遙かに超えてしまっ

た。

友達に絡んでいた男をあつという間に倒す。

裏道にたむろって通行人を脅かしていた不良グループを叩きのめして街から追い出す。

強盗グループを半死半生の目に遭わせて、警備兵に引き渡す。などなど。

そして数々の武勇伝の結果、シアはすっかり近所の若い女性の王子様になってしまったのだ。

そのことがシアの異性交友関係にすっかり影を落とした。

「あたしってお転婆でモテないから」

なんてシアは恋人がいない理由をそう認識しているが、事実はそのんな軽いもんじゃないのだ。

シア本人は全然気付いていないが、外に出ればシアに彼女目当てで近づける男はいない。

彼女に声をかけようとした男は例外なく女性の集団ににらまれ、脅されて引つ込まざるを得なかったのだ。

シアは決してモテないわけではなくて 美人で器量良しなので憧れている男は意外と多い 取り巻きの女性のせいで、男から巧みに遠ざけられているだけなのだ。

今では安全だと思われる男、つまり老人、既婚者、子供しか近づくことを許されないでいる……。

（姉さん…… 可愛いそうに）

この状況を思うとタオは涙せずにはいられない。

この調子では確実にシアは売れ残る。

取り巻き全部に恋人ができる＆結婚してシアから離れていかないう限り、男は彼女に近づけないのだから。

かといって自分では事態をどうにかできるわけもない。

何度かシアに気がある友達を家に呼んでみたものの、すぐ取り巻
きにかぎつけられて散々釘をさされたらしい……。

（女って怖い……）

二次被害としてこのままではタオまで女性不審に陥りそうだ。

ほんの一握りの友人（王家フリークのアゼリア含む）以外、ここ
ら辺の若い女性は全てシアのファンなのだから。

井戸の近くでシアを囲む女性陣の異様な熱気を離れたところから
生暖かい目で見守りつつ、タオはため息をついた。

女性の脅迫なんて意に介さない男がシアを好きになってくれれば
いいのに、とタオは切実に思う。

だが、こちら辺の町人である限りそれは無理そうだ。

貴族とか、離れた街の豪商とか理想的なんだけども……。

（あ、でもシアの男性の好みでもあるか）

以前、冗談だか本気だか

「好きな男性のタイプ？ あたしより強い人かな」
なんて言ってたし。

その条件に見合うのって、兵士とか城の騎士とか冒険家しか居な
いような気がする。

それ以前に初恋もまだだというあの姉に恋愛感情が理解できるか
どうかも問題だけど。

タオは再びふかーいたため息をついた。

貴族でも豪商でも、兵士や騎士でも冒険家でも、このさい王子様
でもなんでもいいから。

ああ、神様。

誰かわが姉シアに春を運んでやって下さい

その夕才の願いは1年後に果たされる……かもしれない。

番外編 タオの独り言（後書き）

意外に姉思いのタオ君の苦悩（笑）の話でした。

そのうちまたタオを主人公にした番外編を書きたいです。
本編終了後とかに。

あと、王子様サイドの番外編とかも……。

第八話 蒼き森の龍 1

始めの予兆は、地震だった。

進んでいくごとに、地鳴りが響く。立っていらなくなる。

龍の居場所に近づいている証拠だ。

ふと気づいてみると、あたしの周りの女の子たちが、さっきより、半分以上に減っていた。

見込みがないと、少しずつ帰り始めていたところに、龍の凄さを表すコレだ。

森の様子も違ってきている。

光りを浴びた、緑の濃い森ではなくて、なんだかうす暗い、蒼色の様子里に変わっていた。

空もあんなに天気がよかったのに、今では灰色の厚い雲に覆われていた。

緊張しているのか、それとも、カンが龍の凄さを教えているのか、さっきから鳥肌が立っている。悪寒もする。

グオウウウ。と遠くで、獣のような咆哮が聞こえてきた。でも、獣じゃない。

もっと地面から、空から全身に響いてくる感じ。

これはきつと、龍の咆哮に違いなかった。

ゾツとした。先程の熊には、全然そんなのなかったのに、声を聞くだけで、全身が萎縮してしまう。

「キヤアアッ！」
ドドドッ。

悲鳴と、何かが駆けてくる音が地面に響いた。
何事かと見ると、前方から女の子たちや馬が、物凄い勢いで来た道を駆け戻ってくるのだ。

どの女の子の表情も恐怖に歪み、青ざめている。

馬も同様で、乗っている子を振り落とさんばかりだ。

地鳴りと悲鳴が響く中、慌てて彼らを避けて、その怒濤のような嵐を過ぎすと、あたしは人のまばらになってしまった道を走り出した。

あれは先頭の方にいた人達だった。きっと龍の居る所に着いたに違いない。

走る毎に、森の様子は違ってくる。

木が少なくなる。

動物の気配が全くしなくなる。

その上、暗い色をした木と木の影から見え隠れするソレが、どんなはつきりしてくるのだった。

岩だった。

灰色をした、巨大な岩。

それが　　どうやらいくつもあるらしい。

女の子達が走る方とは反対に走っていったあたしは、そして、とうとう、道の開ける境にいる王子達の姿を発見したのだった。

その傍には、もう誰もいなかった。

居るのは、王子たち三人だけで、彼らは何故か、恐怖に怯える女の子達とは対照的に、静かな表情を浮かべて、何かを一心に見上げているみたいだった。

あたしは更に走った。

走って、走って、龍の姿が見える所、王子達がいる近くまで来た時、その足は不意に止まった。

止めたのではない。止まってしまったのだ。

龍は、居た。

到底森にはあり得ないような、絶壁にも似た岩と岩の間に、その身を横たえながら。

あたしは息をのんだ。

その姿は、物語で読む竜とは、違っていた。

王子の言っていた通り恐竜型ではなく、蛇にも似た長い胴体をしていて、そこから、鋭い爪のある手足が突き出ていた。

本に出ているドラゴンのような、羽はないようだ。

色は、青をもっと暗くしたような、蒼。

森の色をそのまま具象化したような色だった。

大きな口、尖った鋭い歯。

つり上がった鋭い目は、血のようなカーマイン色をしていて、その瞳が、まっ直ぐ、あたし達を見下ろしていた。

あたしは 恐怖した。

心の底から、怖いと思った。

今まで、こんなことはなかったのに、あたしは今、生まれて一番の恐怖を味わっていた。

止めようとしているのに、全身の震えが止まらない。

足ががくがくと揺れる。歯が噛み合わない。

あたしは思わず、数歩引いた。

グオウウウウ。

龍の咆哮が響きわたる。

耳に、全身に。地鳴りのように身体を貫く。

「きやあああ！」

悲鳴を上げて、女の子たちが来た道を逃げ惑う。

もうほとんど、道には居なかった。

いるのは、辛うじて立っているあたしと、腰を抜かして放心している女の子たちだけだった。

あたしも出来れば、逃げ出してしまいたかった。

でも、足が、吸いついたように、地面から離すことが出来なかった。

なんだろうこの恐怖は。

おじいちゃんから剣や武芸を一通り習ったおかげで、お城の騎士とまではいかなくてもそこそこ戦えると自分では思っていた。

実際、友達に乱暴を働こうとした男や、束になってかかってきた不良たちを難なく撃退できたし。

街で私にかなう男はいないと思っていた。

でもそれはあくまで人間に対してのこと。

獣やドラゴンと対峙したことなんてない。

どんな力を持っているか分からない未知の相手を前に、あたしは本気で恐怖した。

王子は　あたしに勇気があると言った。

でも、こうして、龍に直面してみたあたしには、勇気なんてなかった。ありはしなかった。

立っているだけがやつとなのに、逃げだす勇気さえもないのに。

あたしは、哀しくなった。

あたしに勇気なんてありはしない。

あると思っていたけれど、いざ蓋を開けてみると、あたしはどうしようもなく意気地のない女で　くやしかった。

そして悲しい。自分が情けない。

だって、龍を前にして、向かっていくだけの勇気もないだなんて手も足も出ないなんて　。

あたしは震える手で顔を覆った。

怖い。怖い。どうしよう。

なのに、逃げることもできない。

おばあちゃん。おばあちゃん。

御免。せつかくここまで、来たのに。

治して、あげたかったのに　。

「シア？」

地鳴りのする中、不意に声が聞こえた。

第九話 蒼き森の龍 2

その声に、あたしは顔を上げた。

王子が、振り返って、あたしを見ていた。

龍のすさまじい咆哮の中で、どういうわけか、あたしは王子の声で聞こえて。

おばあちゃんのことか、なぜか思い出された。

おばあちゃん。

優しくて、明るくて、毅然としていた、おばあちゃん。
あたしのおばあちゃん。

いつの間にか、震えが止まっていた。

あんなに、止めても止まらなかったのに。足も動いた。

大丈夫。

あたしは自分に言い聞かせる。

大丈夫よ。大丈夫。

あたしに怖いなんてものは、ない。

おばあちゃんが、ボケで戻らなくなることに比べれば、このくらいどうってことない、もの。

そして、何より。

あたしはキツと龍を見上げた。

とらなくちゃ。何があっても、龍の髭だけは。

あたしは冷静になってじつと龍を見つめた。

観察すること。それが大事。

龍は、巨大な岩を間に身を横たえていた。

少し頭を上げ、あたし達を見下ろしている。

そのために、私が必要とする龍の髭を見ることはできなかった。

あたしはそれでも考えた。

あの巨大な龍から、髭を取る方法を。

大きな岩。

カーマイン色した龍の瞳。

やるしかない。

あたしは自分に対して大きくうなずくと、剣を手に取り、背中に背負っていた余計な荷物をその場に放り投げた。

そして、王子のいる方ではなく、道から外れた林の中に飛び込んだ。

入り組んだ木と木を巧みにすり抜ける。

こうして林の中に入ったのは、龍に見つからずにその龍の傍に立つ岩に近づく為だ。

大きく迂回をして、龍の視界に入らない所まで走ると、あたしは林から出た。

王子が、あたしに気づいた。何か、言おうとする。

けれど、あたしは唇に人指し指を当てて、それを制した。

大丈夫とばかりに、ぎこちなく、だけど微笑む。

ここまで来たら、やる以外にない。

結局、王子の言葉通りになってしまったようだ。

剣を邪魔にならないように背中にくくりつけると、あたしは龍のいる側の反対から、岩に足をかけて登り始めた。

この岩は山のように巨大だけど、幸い、急斜面ではないし、ごつごつしてて足場もある。

きつと上まで登り着けるはずだった。

龍が咆哮する。
地面が揺れる。

さつきより一層近くなったため、そのすごさは岩を隔てても、身に沁みた。

何度かすべりそうになるし、足を踏み外した。

だけど、だけど、あたしは四苦八苦して、時間をかけて、ようやく大きな岩の頂上にたどり着くことが出来たのだった。

比較的足場の安定した所に足を掛けて、あたしは岩の上から見下ろした。

森が見えた。

龍の住む、この場所を中心として放射状に伸びた森が。

そして、その中心に座する龍の姿も。

龍の胴体は、岩と岩の間に出来た隙間に蛇行するように伸びていて、高い所からでも大きく、長く、そして巨大だった。

岩の上からは、龍の頭部も見えた。鱗と同じ色の角もあった。

背中に括りつけた、剣を手取る。

大丈夫。龍は、まだあたしに気づいていない。

すつつ、と息を吸い、吐き出すと、あたしは眼下に王子の姿を探した。すぐに判った。馬上から、真っ直ぐあたしを見ていたから。

残念なことに、顔は遠すぎて見えない。

従者もいた。

龍の姿を見つけても、一步も動こうとしなかった、あの人の姿もあった。

ここにきて、あたしは、ようやくわかった。

王子の姿を、遠くから見下ろして、初めて気づいた。

自分が思っている以上に、あの王子様のことを、気に入っていたことに。

初めて会ったのは、昨日。話したのも、昨日が初めて。
なのに、いつの間にかすっかり気になってしまっていた。
とらえどころがなくて、でもとても惹かれる人。

あの人、怒っているかもしれない。こんな無茶をしてって。
でも、もし無事に戻れたら、可能性のない告白ってやつを、して
みてもいいかもしれない。

第十話 蒼き森の龍 3

大丈夫。あたしは平気。

あたしは、視線を龍に戻した。

あたしに怖いものなんて、ない。神龍の怒りよりも、もっと恐怖だと思ふものを、あたしは知っているから。

こんな危険を冒すよりも、そして、おばあちゃんが元に戻らなくなるよりも、もっとずっと、あたしにとって、怖いもの。

それは、おばあちゃんがあたしの名前も判らなくなってしまうよりも　　そうなったおばあちゃんを、家族が、そして何よりあたしが、いつそのこと居ない方がいいと思ってしまうこと　　。

あたしを育ててくれたおばあちゃんを、大好きなおばあちゃんを、死んでしまった方がまし、だなんて、あたしが、思う。

そんなの、嫌。死んだって嫌。

それだったら、まだ龍と御対面していた方がましだ。

龍を、見下ろす。

やるとしたら、目しかない。飛び下りて、目を刺して　　怯んだ隙に、喉の所にある髭をとるしか、ない。

そして素早く逃げなくちゃ、あの鋭い爪か、口から吐く火にでも殺られてしまうから。

あたしはスウと息を大きく吸った。

剣をぎゅっと握る。ゆっくりと、息を、吐く。

行くっ！

あたしは大きく跳躍した。龍の目を目掛けて。大きく、高く。ところが、その時、切羽詰まったような、でも稟とした声が辺りに、そしてあたしの耳に轟いた。

「やめるんだ、シアっ！ 龍の髭を取ったって、君のお祖母様の病気は治せないんだ！」

「えっ？」

注意が、逸れた。と同時に、龍の頭部が動いて、あたしは完璧に目標を外した。

やばいっ！

あたしは声はならない声を上げて、目をぎゅっと閉じた。

このまま落下すれば、地面に激突する。このスピード、高さ。絶対に助からない。

あたしは両腕で顔を庇いながら、地面に激突するのを待った。

意識が、ふっと浮上した。

落下の速度も、受ける風の抵抗も、感じられなくなった。

……気がつくと、あたしの身体は、ゆっくりと、降りていった。た。

予想よりも長く生きていることにあたしは驚いて、顔を覆っている手を外した。

龍がいた。

あたしを、見ている。その赤い瞳で。

でも表情は穏やかだった。

あたしは、自分の状態の不自然さに気づいた。

だって、あたしは龍と同じ目の高さにいたのだ。

重力とも離されて、でも、立っているわけでもなく、透明な円形のモノに包まれて、守られて。

そして、ゆっくりゆっくりと、龍の前の地面に降ろされていく。

え？

王子が慌てて馬を降りて、走ってやってくる。

その王子の元に、ゆっくりと降下していくあたしは、それをボーと眺めた。

王子が腕を延ばす。

その手に、あたしを包んでいた透明なモノが触れるや否や、それはパツと散って無くなった。

急にがくんと重力が襲ってきて、受け止めた王子ともども、あたしは地面に尻餅を着いた。

「何が？」

あたしは、もう放心状態。

何が起きたのか、さっぱり判らなかった。

でも一つ、白紙に近い頭でも判るのは、あたしが、自分で討とうとした龍に、助けられたということだった。

あたしの顔を覗きこんだ龍の瞳は穏やかで、そしてとても優しい光りが宿っていたのだ。

それを、あたしは覚えていた。

「……シアっ。君って、人はっ。あれ程無茶するなって、言ったのに。勇氣と無謀は違うんだぞっ」

お互い尻餅をついた状態で、王子はあたしに怒鳴った。

ついで、胃の辺りを片手で押えると、痛そうに顔をしかめる。

「胃が痛い……」

あたしはハタツと我に返って、王子を見つめた。

「ど、どうしたの？」

道の入口から、二人の従者が駆けてきた。

「王子、どうしました？ 大丈夫ですかっ」

「どこが痛みますか？ 今、薬をお持ち致しますっ」

という二つの、野太い男の声が同時に辺りにこだまする。

従者は駆けつけると、王子のすぐ傍に屈み込み、俯く王子の顔を覗き込んだ。

何もしてあげることがなく、従者たちの後でおろおろとしていたあたしだったけれど、何かがおかしいことに気づいて、思わず首を傾げた。

「いや、大丈夫だよ」

やや青ざめた顔を上げて、王子は微笑む。

そしてあの人　女従者　が、心配そうに眉をひそめて、言う。

「どうなされたのです？」

低い、よく通る、男の声。

何処かで、聞いたことのある、声、だった。
んん？

女の声にしてはちよつと野太すぎないか？

「…………胃が痛い。心臓もバクバクいつてるし、冷や汗もかいてる」
言いながら、お前のせいとばかりに王子はあたしを見た。

その顔に浮かんでいるのは心配そうな表情と、若干の非難。
だけどあたしはその表情を見そこねた。

従者の顔に釘付けになっていたから。

「あつ」

あたしは、小さく叫んだ。

どこかで聞いたことのある、男の声。

その人物に気づいて、あたしは啞然としてしまった。

あたしの驚愕の視線に気づき、あの人　つまり、井戸で会った灰色のフードを被った男は、悪戯っ子のように、にやりと笑った。

「あ、あなた　っ」

と言ったきり、あたしは絶句してしまった。

だって、だって、男よ！

女の格好しているけど、よくよく見てみたら喉仏あるし、声は完璧に男だし！

井戸で会って、あたしに龍の髭のことを教えてくれた、あの男が、

あろうことか、女装なんてしてて。

これが驚かずにいられる？

森で熊から助けてもらった時は声なんて出してなかったからわからなかったけど、一言でもしゃべってくれてたらずぐに男だって分かっただろうに。

「……ど、どういことよっ！　なんで女装なんてしてるのよ？」

絶句から立ち直ると、あたしは大きな声で叫んだ。

そして、もう一つ、大事なことも思いだしたのだった。

岩の上から跳躍した時、王子が言った言葉だ。

「そ、それに。病気が直せないで、どういことよっ。あなた昨日、直せるって、言っていたじゃないのよっ」

女装の麗人。もしかして、とんでもないペテン師に、あたしは詰め寄った。

「シア。ロイを責めないでくれ。順に説明していくから」

王子が青ざめた顔をしながらそう言わなければ、あたしは奴の首を締めていたかもしれない。

第十一話 祝福

青い顔をしながら身を起こした王子は、あたしから視線を外して、あたしの後ろ、つまり龍に向かって、親しみをこめた笑みを送って言った。

「ありがとう、青龍。やっかいなことを頼んで、済まなかったね」
驚いて後ろを振り返ったあたしの前で、龍はその色を変えた。
暗い色をした鱗は、きらめく青色へ。

血走ったカーマインの瞳は、空を映す、紺碧へ。
龍の頭上の空も、急に灰色の雲が消え去り、水色へと変化していった。

明るい日差しを受けた龍の胴体は、光りを反射し、虹色に輝く。
ついつと、龍は、その頭部を王子に向けた。

その瞳は、あの時の鋭い殺気が嘘かのように、理知的で、静かで、慈愛に満ちていた。

龍は口を開いた。

でもそこから出てきた言葉は、人語ではなく、あたしには理解できなかった。従者の二人も同じようだ。

けれど、その言葉に反応を示した人間が、ここにはいた。

シオン王子だった。

「ああ、ありがとう。……おかげで痛みがなくなったよ」

うれしそうにそう言って、明るく笑う。

もう大抵のことは驚かないつもりだったけれど、これには、あたしもびっくりしてしまった。

つまり、王子は『祝福を受けし者』だったのだ。

ドラゴンと呼ばれる種族は、もちろん、人語を理解できるし、喋ることができるんだけど、人間には竜の言葉は判らないし、また言語形態が全く違うので、喋ることは不可能なのだ。

ただし 竜に祝福を受けた人間だけは、竜の言葉を理解することができる。

竜がそういう能力を与えるのだ。

それは要するに、竜に認められた事と同じになる。

というのも、基本的に、ドラゴンは人間という種族を卑下し、下等とさえ思っているものだからだ。

その竜に祝福を受ける、なんて、もう並大抵では出来ない。

そういうことを聞いてはいるけど、実際に祝福を受けた人間は、見たことがなかったんだけど……。

あたしはまじまじと王子を見つめてしまった。

王子はあたしを見つめ返し、

「と、いうわけで、君が昨夜言った通り、これは全部、ヤラセだったんだ。僕には、龍を退治する気なんて無かったんだよ」とすまなそうに、言った。

「この国には、十七の年に伴侶を決めなくちゃならない決まりがあるだろう？ ……でも僕には、選考会の内容を提示しようにも、好きな人なんて居なかったんだ」

そこまで言い、なぜか従者二人の方を見る王子。

従者二人は笑っていた。

それも普通の笑いではなく、黒髪の背の高い方の従者は苦笑し、女装している従者はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべていて。

王子はそれを見て、やや顔を赤くしたみたいだった。

なんだろうか、この反応は？

「で、えーと、十七の誕生日が過ぎたら、この二人と少しの間旅をすることになっていて、とてもじゃないけど、花嫁を選んでいる余裕なんてなかった。選ばれた直後に相手が、半年程行方不明になるわけだし。選ぶのを延ばそうと思ってた時、ロイが言ったんだ」

「旅に同行すればいいって、ね」

あ、俺の名前はロイね。そう明るく付け加えたのは女装した従者

だった。

間違いない男の声なのに、外見は美女で未だに非常に違和感を感じるなあ……。

「女性がいれば雰囲気明るくなるし、男性だけで旅をするより、いろいろ警戒されずにすむし。それに俺は、何より、野郎だけで旅をするなんて嫌だったんですよ」

美女が笑う。

女装して言う台詞じゃない。

「言っておくけど、男だけの旅が嫌だって言っただけなのはロイだけだから」

王子はそうツツコミを入れると話をもとに戻した。

「まあ、そういったこともあって、僕は花嫁コンテストの内容をドラゴン退治に決めたんだ。というのも、同行させるとしたら、ある程度護身はできなくちゃならないだろう？ 弱々しい女の子じゃ駄目なんだ。その点ドラゴン退治におけば、最終的には腕の立つ女の子が残るはずだから。……君みたいな、ね」

そう言っただけ王子は、地面に下ろされた時に放り投げたあたしの抜き身のままの剣に触れた。

柄の方を差し出されて、あたしはその剣を鞘に収める。

そして更なる説明を求めて王子の顔を見上げた　　が、どういふわけか王子は顔を赤くして私の方は見ずにあさっての方を向く。

「……初めて見た時から、結構いけるかなって思ったんだ。好奇心強そうだったし、剣も扱えそうだったから」

「プハッ」

ロイが急に嘔き出す。

ビククリして振り向くと、ロイがこちらに背を向けて震えていた。でもそれは寒いとかではなくて、どう見ても笑いをこらえている感じがした。

もう一人の従者　　後で名前を聞いたらリュウイと名乗ったも、口を手で押えて笑いをこらえているよう。

な、なんなのさ、この反応は？

どうも王子の言っていることに笑っているようなんだけど……意味分かんない。

しかも、ロイってば笑いながら「ツンデレだ……王子……そういうキャラだったんだ」とかブツブツ言っているし。
「とにかく！」

王子がロイの呟きをかき消すかのように急に大きな声を出す。
でも、まだまだ顔赤いし、あさつての方を向いたまま……。

「せっかくだから君にも参加して貰いたかったんだ。でも、その予定はないって言うし……。それで　君を参加させようと、ロイに嘘をつかせたんだよ」

嘘。

つて、今、思いっきり嘘って言ったよね。

「……じゃあ、本当に嘘なのね？　おばあちゃんの病氣治せないの？　……そんなあ」

あたしはてがつくりと垂れた。

騙されたことに、腹を立てる気力もなかった。

せつかくこんな所まで来たのに。来たのに。

それが全部無駄だったなんて……。酷い。

肩を落として嘆くあたしに、龍が顔を近づけてきた。

鼻先が触れそうな程、近づけて　ぎよっとするあたしの顔を

静かに覗きこんだ。

青い宝石のような瞳に、惚けたあたしの姿が映る。

龍の瞳は　不思議に澄んでいて、綺麗だった。

あの時あんなに恐ろしかったのが嘘みたいだ。

龍って、こんなに優しいものだっただろうか　。

チカチカ。

龍の瞳に反射する光りが、眩く瞬いた。と、同時に、あたしの頭

に、一つの声が飛び込んできた。

勇気ある娘よ。

それは、龍の言葉だった。

耳に、不可思議な音が響いてくる。金属的な、はじけるような、声。

「え？」

あたしはパチパチと目を瞬かせた。

私の身体の一部は、確かに薬にはなる。けれども、それは身体的な治癒であって、精神的なものには一切作用しないのだ。そして一度衰えたものを元に戻すこともできない。だから含んでも、不老不死にはなれない。命を与えることも出来ない。

その龍の言葉の後を、王子がついだ。

「ボケっていうのは、まあ、脳の損傷でもあるようだけど、それとたとえば龍の髭の力で直しても何もなかった時に戻せるわけではないんだ。衰えたものを元に戻すことはできない。……記憶力が無くなつていくとか、忘れっぽくなるとか、老い 万人に訪れるソレと同じように、治すことはできないんだ。龍の力をもつてしても」

「じゃあ、もうボケてしまった以上、元には絶対戻せないのね」
あたしは泣きなくなってしまった。

おばあちゃん。おばあちゃん。

元には戻せない。聡明で明るい、あのおばあちゃんには。

だが、止めることは出来る。これ以上にはならないように。

という声が、頭に響いてきたと思ったとたん、あたしの手の中に、太く長いモノが現れた。

それは、龍と同じ、蒼色をしているひも状のもの。
それがいきなりあたしの手の中でクルクルつと丸まり、蒼い球体
の石のようなものになった。

「龍の、髭だよ。君にくれるって。お祖母さんにお守り代わりにも
つてもらうといい。少しずつ脳の損傷を直していつてくれる。そう
したらこれ以上ボケがひどくなることはないと思うよ。もしかした
ら少しは回復するかもしれない」

よかったね。と王子はにっこり笑って言った。

そばにいたロイとリュウイは、何が何だかわからないといった表
情をしていて、それであたしは、龍の言葉が聞き取れたことの意味
に気づいたのだった。

龍の祝福。

「本当……？」

あたしの口から、驚きの言葉が出た。
でもそれは、龍の髭に対してなのか、それとも龍の祝福を受けた
ことに対する驚きなのか、あたし自身にもよく判らなかった。

……。
単身で、しかもあのような方法で、私に向かってくるとは

龍はその深く青い目をうれしそうに細めた。

こんなに楽しんだのは、王子がここに初めて訪れた時以来
だよ。…… 勇気ある娘。

「あ……」

あたしは、思い出して、俯いてしまった。
勇気ある、だなんて。

龍の前に、あたしはどうしようもなく震えてしまった。怖かった。

恐怖で身体が竦んでしまった。

立ち向かえたのは、おばあちゃんのことがあったから。
それが無かったら、あの女の子たちと同じように、あたしも逃げだしていた。

これが、勇気のわけ……ないわ。

視線を落としたあたしを、王子達は不思議そうに眺めていた。
けれど龍には、あたしの心が分かったみたいだった。

その青い瞳であたしの顔を覗き込む。

それは、勇気だよ。娘子。他人の為に、力を尽くす。それも勇気だ。王子が、私に今回の事を頼んだのは、ただ腕の立つ娘を選びたかっただけじゃなくて、一番勇気のある娘を見極めたかったからなのだ。でなければ、わざわざ竜退治にしくとも、他にいくらでも方法があった。……巨大なモノを前に立ち向かえる勇気。他人のために尽くす優しさ。それが王子の求めていたものだったのだ。

あたしは王子を見た。

王子は優しく、微笑んでいた。あたしに向かって。
そして、力強くうなずいた。

「ありがとう」

あたしは龍の髭を胸にぎゅっと抱きしめた。

龍は、ああ言ってくれたけれど、自分の勇気のなさ。あの震え。本人はよく判っている。あたしは本当に怖かったのだ。
龍に向かっていている間も、怖くて、怖くて、逃げだしたかった。だけ。

王子は、あたしに勇気があると、言ってくれた。龍も言ってくれた。

だから、あたしは、自分の中の勇気を信じてみようと思う。
自分の中の勇気を、少しずつ育てていってみようと思う。

王子の為、龍の為、そして今度は
自分の為に。

第十二話 王子の花嫁

そうして、あたし達は、龍のいる森の中心地を後にした。

行きに来た道はすっかり消えていて、代わりに今度は蛇行しないで真っ直ぐ続く道がいつの間にか出来ていた。

これも龍の力なのだろう。

森にいたはずの女の子たちの行方が気にはなっただけど、あの龍のことだから、きちんと迷わず森の外まで出してくれるだろう。

あたしは思い出したのだ。

不可侵の森と言われているこの森には多くの冒険者が入っていったけれど、龍の居場所に着けなかっただけで、迷って死んだという話は未だ無かったことを。

王子の馬と一緒に乗せてもらって、道を行くあたしの耳に、歌が聞こえた。

その歌に反応するように、木が、そして大地が青く光る。

龍の色だ。

森全体が、歓喜して、喜びを歌い上げていた。

龍の機嫌は、すこぶる良いようだ。

あたしはしばし、その歌に耳を傾けた。

そして、王子に尋ねる。

「どうして、龍は、一人であそこに住んでいるの？ 他にも、六体いるんでしょう？」

王子は、あたしの後ろで手綱を取りながらしばらく考えて、そして、口を開いた。

「うん。……僕は、彼に初めて会った時からずっと考えていたんだけど。ドラゴンには二つ種族があるだろう？ 竜は、この世界にたくさんいるけれど、龍の方は世界に六体しかいなくて、しかも増えないし、死なない。形態も違う。……聞いたところによると、この

世界には、海を挟んで六つの大陸があるそうなんだよ。僕たちのいるこの大陸を含めて。これって、龍の数と一致するだろう？ だから僕は思ったんだ。竜は、生物が進化していった一つの過程である存在だけど、龍は、大地の創造と共に生まれた、その……大地の意思や力そのものが、龍という形態を取っているんじゃないかって。だから、一つの大陸に龍は一体しかないんだ。大地そのものなんだから。……ね、シア」

王子は、急に声を落として、つぶやくように言った。

「僕はね、他の所はどうだか判らないけど、あの龍が、僕達人間に好意的であることを心から感謝しているんだ。だってそれって、人間が、大地に見放されてないってことだもの。……龍。神の龍。僕は、その龍から祝福を受けたことを、心から誇りに思うよ……」

その誇らしげな顔を見、あたしは手の中にしっかり握っている龍の髭　蒼い石　を見た。

龍が大地そのものなら、これは、大地の贈り物だ。

「あたしも、誇りに思うわ。……おばあちゃんの病気を、完全に直せないのがちよつと残念だけだね」

もう一人の従者リユウイに言われて、すっかり化粧を落とした口イが、馬を並べてきて言った。

「少しずつ直していけばいいんです。やる事が無いから、ボケていつてしまったのでしょうか？　ボーとしている暇もないくらいにいるいろとさせてあげればいいんです。幸い、もうボケている暇もなくなりそうですよ。何しろ、かわいい孫娘が王子様の花嫁になるんだから」

にやにや。化粧を落としても相変わらず端正で綺麗な顔に、からかうような笑みを浮かべるロイ。

あたしは「はあ？」とまぬけた声をだしてから、ハタっと思い当たった。

龍に会ってその後いろいろあったもんだから、このドラゴン退治のそもそもの目的をすっかり忘れた。

王子様の花嫁を決めるコンテストだったつけ。

……でも。

「あたし……花嫁になるつもりで、来たんじゃないわよ。それに、ドラゴンを退治してないわよ？」

「ドラゴン退治をなし遂げた人が花嫁、だなんて誰も言っていないですよ。ももとの目的が、アレなんですから。……それに龍に立ち向かっていったのは、あなた一人だけですし、その龍に祝福まで受けた。これ以上の資格なんてありませんよ」

女装をして、他の花嫁候補達を追っ払った甲斐がありました。と、ロイは龍に負けないくらい上機嫌で言った。

後日談になるが、ロイが女装をした理由を彼の友人リュウイに尋ねたところ、

『建前は、王子目当てで何も考えていない女共の出鼻を挫くため、と言っていたけれど……絶対あいつは楽しんでた』

と苦々しく答えてくれたのだった。

本音はともかく、彼の女装は、確かに威力があったと思う。

近くに行かない限り男には見えなかったし、むかつくくらい美女だったし！

王子様目当てだった娘さんたちにはさぞかし脅威に見えたことだろう。

それはともかくとして、あたしは、ロイの言葉に「王子の花嫁」という現実がのしかかってきたような気がして、急に落ち着かない気分になった。

王子の花嫁。

ということはこのシオン王子と結婚するってことだね。

そして……将来はこの国の王妃？

あたしが？

小さな宿屋の娘であるあたしが？

そんな自分、ちっとも思い浮かばない！！

それに、これは自分一人の問題じゃないし。

あたしはもう一人の当事者である王子を恐る恐る振り仰いだ。

「ええと……シオン王子？」

「何だい？」

彼はさつきからあたしとロイのやり取りをやさしげな笑みを浮かべて見守っていた。

その表情からはあたしが王子の花嫁になるのには異存なさそうである。

いや、でも分からないぞ。

王子を慕っている女の子はたくさんいる。

こんなあたしみたいな庶民で、王族のことなんて分からなくい、剣を振りましているのが得意だっていう女らしくない人はもしかしたら花嫁にしたくないかもしれない。

だって王子の横に立つのに相應しいものを、あたしは何一つ持っていないんだもの。

「……あ、あたしでいいの……かな？　花嫁になるのに、もっと相應しい人がいるんじゃない？」

「シアがいい」

即答すると王子は手綱を掴んでる手を離し、あたしを背後からふわっと抱きしめた。

わわわ！

「他に相應しい人間なんていない。僕はシアがいい。共に人生を歩んで欲しいと思うのは……シアだけだ」

耳元で真剣にささやかれて。

あたしの心拍数は急上昇した。

顔や耳までが一気に赤くなるのが自分でもわかった。

こんな場面生まれて初めてで。

この後どうしたらいいのか、どう反応したらいいのかさっぱり分らない……。でも。

不意に龍に切りかかるうと岩場にいた時のことを思い出した。

あの岩場の天辺で、あたしをまつすぐ見上げていた彼の姿をみて想ったこと。

大変だろうということは分かっている。

嫌なこともあるかもしれない。

でも、この人の傍に居て、何を成すのか見てみたい。

この人の横に立って。いつまでも。

あたしは自分の身体にまわされた腕を両手でぎゅっと握り締めた。

「あたしも……」

そっとささやく。

王子にしか聞こえないくらいの声で。

「あたしも、貴方の傍に居たいです」

。そんなあたしたちを祝福するように、龍の歌が頭上に響いていた。

第十二話 王子の花嫁（後書き）

昔書いた原稿では、シアはもつと淡白でした。

王子の花嫁についてロイに言われたときも「まあ、王子の傍にいるのも楽しいからいいか」というノリで引き受けていたし（笑）。

それじゃあんまりだろうと思って今回、改稿しました。

シオン王子にプロポーズらしきことを言わせて、糖度も上げてみましたけど……ど、どうでしょうか？

ちよつとは甘々になってるといいな。

次回はエピソードです。

エピソード（前書き）

ようやく完結です！

エピローグ

こうして。

あたしは、王子と婚約してしまったわけだけど。
でも大団円までには、ほど遠かった。

親は喜んだ。タオも喜んだ。

王様も王妃様も、大臣たちも諸手を挙げてあたしを受け入れてくれた。

だけど友人一同は大反対した。

アゼリアは王室情報をこまめに知らせるという条件のもとに祝福してくれたけど。

その他の女の子たちは号泣した。何故か。

「シア、お嫁になんか行っちゃ、嫌!!」

「あたしたちの傍から居なくならないで!」

あたしなんか王子様と結婚するのは似合わないから反対するの
かと思っただけど、どうもみんなの言動を聞いてみると、王子様とか
は全く関係なくて、あたしが居なくなるのが反対のようだった。

「姉さんは女の子だちに好かれてるからねえ」

弟のタオはなぜか遠い目をして言った。

「相手がシオン王子じゃなくなっただって、大反対するよ。たとえ王様
だろうと神様だろうとね。……ああ、でも王子でほんつとよかった
! ……さすがに彼をリンチすることはできないだろうしね……ボ
ソ」

タオの後半は言葉はなぜか聞き取れなかった。

友人の反対にあいながらも、着々と周りの準備は進んでいく。

痴呆症だったおばあちゃんも、龍から貰った髭を身に付け始めて
から、少しずつよくなっているようだった。

あたしのこともちゃんと認識してくれる。

シオン王子をエルセリオ王と間違えることもなくなった。
これこそ大団円。ハッピーエンドだ。
だけど。

あたしはそれと引換えに、地獄のような毎日に追われていた。
というのも、王子妃として覚えなければならぬことが山程あつたため、城に住み込んで一日中勉強をさせられて。
毎日毎日頭の中にいろんなことを詰め込みさせられて。

ああ、気が狂いそう！

言葉遣い。作法。法律。あたしにそんなの出来っこないわよ！

と、嘆きたいのはヤマヤマだったけれど、もう後には引けない……んだよねえ。

なんであたし王子のプロポーズにOKしちゃったんだろうか。
そう思うことが一日に数回はある。

本人を目の前にして言ったこともあるけど、

「もうシアはOKしちゃったんだから、今さら撤回はできないよ。
だから、諦めて？」

とにこやかに言われるだけだった。

そんなあたしの唯一の慰めは、王子の諸国漫遊の旅についていつてる間はお勉強をしなくてすむ、ということだった。

それにあたしは王都の周辺から出たことがない。

いつか他の街や村、はたまた別の国に行ってみたいと思っていたので、ものすごく楽しみにしていたのだ。
だけど。

どういうわけか王子は、いつ出発するとか言わないどころか、あたしの前では一切旅の事は口にしない。

もしかして旅に出るには無しになったのかな？

あたしが旅のことについて口にするたびに話題を変える王子を見

てそう思っていたのだけれど。

その日、あたしは妙な胸騒ぎがして日が昇り始める前に目を覚ました。

城の中に与えられた豪華な部屋の窓から、新鮮な空気を吸おうと外を見たあたしは目をパチクリ。

城の裏門が開いていて、その近くに三つの人影と馬の影があったのだ。

その人数といい、背格好といい、どっかで見たことがあるような……。

ま、まさか!!

あたしは慌てて着替えもせず部屋を飛びだした。

外はまだ群青色をしていて、ようやく門の遙か向こうに、薄ぼんやりと光りが見えはじめたばかりだった。

「どうということよ。あたしを置いていくつもりっ!？」

走りながらそう叫ぶと、あたしの姿を認めた王子は、明らかにヤバイという表情をした。

馬には、鎧も鞍も、そして必要な荷物ももう乗っていて、あとは騎乗するだけの態勢だった。

ようやく走り寄ったあたしに、王子は白々しくも笑って、

「そんな格好でいちや、駄目だよ。明け方はまだ寒いんだから」などとトボけたことを言った。

その言葉に、あたしはブチ切れた。

王子の服の襟をぐいぐい締め上げ、

「いったいどういうつもりよっ!」

「……いや。よく考えたんだけどね。やっぱり女の子には危険だよ。だから君は大人しく留守番していて欲しいんだ」

「ちょ、冗談じゃないわよ。今さらっ!」

顔を真っ赤にして怒鳴りつけるあたしに、

「まあまあ」

となだめるように笑って王子ってば、やんわりとあたしの手を外してのたまった。

「いや、本当は連れて行くつもりだったけど、シアってば、無茶するし無謀すぎるから心配になってね。君が無茶する度に僕は胃に穴が空きそうな思いをしなくちゃならない。でもこれから行く場所に龍は居ないから痛みを和らげてくれないし、こればかりは龍の髭でも直せそうにないから」

だから今回は諦めてくれ。あっさりそう言つと、王子は再度怒鳴りつけようとしたあたしの顎をつかんでそのままぐいっと引き寄せた。

王子の唇とあたしの唇が触れ合う。

な、な、何事！？

がちり両手で頬をホールドしてぎゅうぎゅう押し付けられる口付けに、あたしは声にならない悲鳴を上げた。

「んーっ、んーっ！！」

ちよつと、いきなりこんな人前で何するのよっ！

そう言いたかったけど、もちろん口が塞がれていて声にならなかった。

唇がようやく離れ、あたしが顔を真っ赤にして深呼吸を繰り返している間に、王子はさっさと馬に乗ってしまっていた。

ムキーンッ！

キスでごまかそうとしたわね！！

あたしはいつの間にか準備し終えて、主のラブシーンに遠慮してあさつてを向いていたロイとリュウイに矛先を向けた。

「二人とも何とか言ってよっ」

「え？ 今のキスシーンについてですか？」

とバカな事を言ったのはもちろんロイだ。

「ち、違うわよ！ 私をのけ者にして旅に行くことについてよ！
ロイ、あなた、男だけの旅は嫌なんでしょっ？」

あたしのその言葉に、従者二人は困ったように顔を見合わせた。

「……王子の意向ですから」

そう答えたのは、リュウイだ。

「……う、裏切り者お……」

あたしが拳を握ってプルプル震えていると、王子がすぐ傍に馬を寄せてきた。

「じゃあ、シア、大人しく待っててね。僕が居ないからって、街のゴロツキに喧嘩を売ったり、泥棒を追いかけたり、不良と立ち回りを演じたりしないようにね」

「え？　なんでそんなこと知って……」

あたしが全部を言わないうちに、馬が勢いよく走りだした。その後二つの蹄が続く。

「ちよっ……！」

止める隙もなく、三人は開いた門から金色の光りの差す広大な大地に向かって　行ってしまった。

あたしは呆然と、その後ろ姿を見送った。

こんなのあり？

酷いよ、裏切り者！

あたしの事心配して神経性胃炎になってしまふのは、王子の勝手。
あたしのせいじゃないじゃない！

太陽が昇りはじめ、明るい日差しが東の方角から伸びてくる。

その日が昇る方角に行った王子達の姿は、もう金色の光りに融けて見えない。

あたしはぶつぶつ呟きながら、その場に立ち尽くしていた。

空は暁色からだんだん青色へと変わっていていく。

……青。森に住む、龍の色だ。
そう、頭のどこかで考えた時。

勇気ある娘よ。

という、どこか笑いを含んだ楽しげな龍の声が響いてきた。
それは立っている大地からのようでもあり、頭上に広がる空からのようでもあった。

あたしは、俯き そして、次に顔を上げた時には、心は決まっていた。

待っているなんて、あたしらしくない。
彼らがあたしを置いていくなら、追っていけばいい 。

あたしは踵を返した。
今から支度して、王様に許可を貰って、家まで行って、事情を話して。

そうすると、半日くらい差が出来てしまう。
追いつけないかもしれない。
でも。きっと追いつける。
追いついてみせる。

昇り始めた陽の光りが、城の壁を金色に染め上げている。
眩しい、その光りの中へ、あたしは走っていった。

そして、冒険は始まる 。

エピローグ（後書き）

ようやく本編が完結しました！
次回からは亀更新で番外編を何本か書きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908/>

龍の髭

2010年10月8日10時44分発行